

封印から開放されたら十年経ってたんっすけど……

テケテケ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

異世界転生……その言葉を聞いて皆は何を思い浮かべるだろうか？

まあ色々有るだろうが俺が転生したのはとある漫画のとあるラスボスキャラの息子……しかもその息子も見覚えが……

「あれ？もしかしてアタシ成り代わってます？」

2023年5月24日 一話加筆修正

2023年7月28日 二話加筆修正

## 目次

ラスボス（父親）封印して帰ってきたらなんか10年経ってるし、ア タシのこと嫌ってた同期に泣かれたんですが、これ一体どういう状 況っすか？	1
ラスボス（父親）封印して帰ってきたらなんか10年経ってるし、知 り合いと先輩方に心配されたんですが、皆さん何か変なものでも食べ ました？	49

ラスボス（父親）封印して帰ってきたらなんか10年経ってるし、アタシのこと嫌ってた同期に泣かれたんですが、これ一体どういう状況っすか？

「いやあ、此処は何時まで経っても草の1つも生えないねえ。本当にどうなってんの？」

「悟、いいから口じやなくて手を動かしなよ。」

「わあってるよ。つうか、ここまで綺麗になってんなら別にいいだろ？相変わらずの真面目ちゃんかよ……傑。」

「おそらく硝子達だろう……10年間、毎年毎年真っ先に此処を掃除してくれるからね。」

そう言っただけは、此処を掃除したであろう同期の女と後輩、そして彼を慕っていた自分達の教え子達の姿を思い浮かべた。

十年……彼が死んでから十年もの年月が過ぎた。その年月は、当時の私の考えが、どれだけ浅はかであったと痛感させるには十分過ぎる時間だった。

藍染喜助……当時最悪の呪詛師と恐れられた男の一人息子であった私達の同期。

私達は、呪詛師の息子というだけで、彼を悪だと決めつけて、勝手に冷酷で非道な人間だと解釈して、彼を私達から遠ざけて……そしてその結果、彼を孤独へと追い込んだ。

私達は、ただ目を背けていただけだったんだ。

殺されたと思っていた理子ちゃんは、喜助が秘密裏に保護していた。死体の代わりに、彼が製作した「義骸」を使い、その死を隠蔽すること。灰原達の時だって、君は自分の身を顧みず、彼らの命を救ってくれた。悟への任務が僕へ割り振られた時だって、君はその任務の半分を肩代わりしてくれた。美々子と菜々子の時だって、君は私が暴走しない様に立ち回ってくれた。

私も悟も硝子も……気付かない所で、君に助けられていた。

そう……思い返してみれば、君が噂で聞くような人間で無いことなんて、すぐに分かった筈だったんだ。

本当の彼は、誰よりも優しく、聡明で、仲間を思う男だった……私は、私達は、何時だって気が付くのが遅すぎる。

『お前がつーお前達が兄さんを殺したんだ!!兄さんを独りにしてっ!兄さんだけに責任を負わせてっ!!返せよっ!兄さんをつ……私達の兄さんを返せよおっ……!!』

『あいつは馬鹿な奴だよ。ガキのくせして、全ての責任を独りで抱えやがって……素直に助けてくれて、そう泣き喚けば、俺も手を貸してやったのよ……まあ、そう出来ねえようにした一端は、テメエらガキ共のちっぽけなくだらねえプライドのせいでもあるがな……ハッ!これじゃ、どっちが猿だか区別がつかねえな?』

私が猿と侮蔑する者達から投げ掛けられた言葉も、その時ばかりは言い返すことが出来なかった。私達が彼に行ってきた所業は、どうやっても消すことは出来ない……事実、彼は消えた。最悪の呪詛師と共に、自身諸共道連れにする形で、私達の目の前で、空間の割れ目へと姿を消した。

『もし、ボクがアナタの息子じゃなかったら……ボクも彼らと馬鹿やって笑い合えていたのかもしれないね……』

あの時、最期にお前が呟いた言葉は、呪いとなって10年経った今でも忘れることが出来ない。

……なあ喜助、君が居なくなってから10年が経ったんだ。私達も大人になった。あの後、私達も色々と考えて、今は教師として教鞭をとっているんだ……意外だろう?全部君のおかげだよ。これから先、私達のような呪術師を出さない為に……今でも猿は嫌いだけど、それよりも優先させるべきことを見つけたんだ。

謝って許されることじゃ無いことなんて理解している。償いきれるような罪で無いことも理解している。でも……それでもやっぱり、こう思わずにはいられない。

「悟……あの時、私達が少しでも喜助を理解しようとしていれば、結果は変わったのかもしれないな。」

「……………そんなこと、10年経った今でも後悔してるよ。」

そう言っつて俯く悟の顔を見て、私の中で降り積もる後悔の念が更に嵩を増やす。

「すまない……………不躰なことを言ったね。」

「気にすんな。これは俺達が一生掛けて償つてく罪だ……………そろそろ帰るぞ。」

悟は一言そう言っつと、踵を返し山を下り始めた。

「……………そうだね。」

私もそう言っつて、悟の後を追っつて友の眠る墓に背を向けるのだった。

パキンツ……………

2人の去つた山奥で、空間の割れる音が静かに鳴つた。

「よっし、今日はここまでだな。」

そう言っつてそそくさと帰り支度を始めた真希さんに、一緒に実技を受けていた釘崎が怪訝な目を向けた。

「ねえ伏黒、何か今日の真希さん変じゃない?」

「……そうか？そんなことねえだろ。」

「ん？伏黒、あんたもなんかおかしいわね？何かソワソワしてるって  
いうか。」

「……………別に、気の所為だろ。」

こいつ……変な所で鋭いな。そんなことを考えていると、真希さん  
が俺に向けて言葉を掛けてきた。

「おい恵、お前も来るんだろ？いつもの所で集合な。」

「タイミング悪いです真希さん……………」

真希さんからの言葉に、一斉に俺に集まる視線……………

「やめろ釘崎、そんな目で俺を見るな。別にお前達が思ってるような  
ものではない。断じてない。」

「まだ何も言っていないわよ？てか、あんたそんなに喋れるキャラじゃ  
ないでしょ……………ますます怪しいわね。」

そう言っただけを睨む釘崎……………本当にやめろ。別にそんなんじゃない  
え。真希さんも、急ぐ理由は分かりますけど助けて下さいよ……………

「ハア……………分かったよ。分かったから、そんな目で見るな……………  
お前も連れて行くから。」

「何よ、分かってるじゃない。」

真希さんと一緒にお出かけなんて、そんな羨ましいこと独り占めさ  
せないわよ！

そう言っただけの背中を叩く釘崎だが、痛いから止めて欲しい。

「それで？結局伏黒は今日何処に行くつもりだったん？」

釘崎の言葉に辺りが静まり返る……………狗巻先輩やパンダ先輩は理由  
を知っているから言い辛いんだろう。

俺はもう一度、大きなため息をついて、釘崎からの質問に答えた。

「俺の……………俺と真希さん達の父さん……………いや違うな。兄代わりの人が  
住んでいた家だよ。」

「おい恵、何で野薔薇も一緒に来てんだ？」

「しようがないでしょ……釘崎がどうしても行きたいって聞かなかつたんですから。ていうか、釘崎の目の前で、真希さんがあんな発言するからこうなつたんでしょ。どうにかして下さい。」

「チツ……まあいいか。別に減るもんじゃねえし。」

そう言いながら、ガシガシと頭を搔く真希さん。原因を作ったのは貴方でしょうが。まあ言わないが。

「ハイハイ！私も真希さんのお兄さんに挨拶がしたいです！」

釘崎の言葉に、真希さんの顔に影が落ちた。

「えっ、ど、どうしたんですか真希さん……？」

「……釘崎、あのな」

「……恵、もしかして野薔薇に話してないのか？」

「すみません……言い訳にしかありませんけど、俺も急いでたんで……」

「あのなあ……悟じゃねえんだから、そこら辺は話しとけよ恵。」  
「ぐっ……」

五条先生とだけは一緒にされたくは無いが、こればかりは俺が悪いから言い返せない。急いでいたのは事実だし、説明を怠っていたのも事実だ。けどどうしようがないじゃないか。最近は任務が忙しくて、中々寄れなかつたんだ。

俺が苦い顔をしていると、おそらく察したんだろう。釘崎がオズオズと口を開いた。

「あ、あのく……もしかしてだけど……伏黒と真希さんのお兄さんって……」

「……ああ」

「待て恵……私が話す。」



俺の言葉を遮り、真希さんが言葉を綴る。

「お前らの察した通りだ。私の兄貴は、世間一般でいうと「死んだ扱い」になってる。」

私の兄貴の話をしよう……

私が兄貴と出会ったのは、今から11年前……私が5歳の時だった。その頃から禅院家での私達の扱いは酷いもんだった。人権なんて知ったこつちやねえ、文字通り人らしい扱いなんてされた試しがなかった……そう、初めて兄貴と会ったあの日も、私は使用人達から執拗ないじめを受けていた。

もしも地獄があるとすれば、今私が生きているこの世こそが正しく地獄だ。

もういつそ、死んでしまった方が楽何じゃないか。

そんな考えが頭を過ぎった時、

「お嬢さん、大丈夫っスか？」

私の前に兄貴は現れた。

ナチュラルな色の抜けた金髪に人の良さそうな笑みを浮かべた男は、慣れた様子で私に視線の高さを合わせるようにしゃがむと、慣れた手付きで私の怪我を処置し始めた。

「あ、あの……」

「ん？」

「あ……ありがとう……」

私がお礼を言うと、

「何、気にすることはないっスよ。アタシがキミの怪我を放っておけなかつただけですから。」

そう言つて、うつすらと微笑んだ。

頬が熱くなるのを感じた。これまで誰かに優しく接されたことなんて無かつたし、ああやつて笑顔を向けられたことなんて、真依以外に見たことが無かつた。それがどこかむず痒くて、でも嬉しくて……思わず笑みが溢れてしまった。だけど、そんな私を良く思わなかつたんだろう。

「いけません喜助様っ！そのような出来損ないを相手にしては、貴方まで穢れてしまいます!!」

「そうですっ！其処にいる者は呪力も持たない猿なのですよ!!」

さつきまで暖かかつた心が急激に冷めていく……別に猿とか落ちこぼれとか言われるのは慣れている。だけど、さつきまで私に優しく接してくれたこの人に嫌われてしまうことが怖くて、あの優しい眼が、彼奴等みたいな冷たい眼に変わってしまうのが怖くて……私は兄貴の顔が見れなくなつた。

「この娘が猿……」

地の底から響いている様な、低く冷たい声……ああやつぱりこいつも、この家の人間と同じなんだ。

「……一体、貴方達は何を言っているんだ？」

……そう思っていた。

「ヒツ……!!?」

「おや、聞こえなかつたですか？もう一度言つてくれないかと聞いたんですよ。」

ただ声を発しただけ……それだけの筈なのに、周りの空気が使用人達を押し潰さんばかりに重くなる。その言葉の対象で無い私ですら、一瞬息の仕方を忘れてしまう程の重圧だ。今矛先を向けられている当人は溜まつたものじゃ無かつただろう。

「ボクの聞き間違えで無ければ、貴方方は今この娘のことを猿と……そう呼んだように聞こえましたが、なら今この状況で、少し圧を与えただけで無様な姿を晒している貴方方は、一体何ですか？」

「……よく聞け。この娘は猿などでは断じて無い。一人の意思を持った人間で、貴様らなど足元にも及ばない強さを持った一人の女性だ。貴様ら如きが見下せる様な者じゃない……よく覚えておけ。」

「ヒイツ!? すつ、すみませんでしたっ!!」

そう言つて怯えながら使用人達は逃げ出した。その姿が見えなくなるのと、兄貴はふう……と息を吐き、再び私に顔を向けた。

「いやあ、すみませんね。怖がらせちゃいましたか?」

其処にさつきまで使用人達に向けていた威圧的な表情は無かった。ただただ私を心配している様にハの字に歪められた両眉の下、不安そうに揺れながらも慈愛にみちた瞳が其処にあった。

「なん……で……」

「ん?」

「何で……私を助けたんだよ……」

「……」

「あいつらの言う通り、私には呪力も無けりや、呪霊すらも見えねえんだぞ……」

これまで溜め込んだ弱音がポツリと溢れる。自分で言っておいて虚しくなった……どうせ私は落ちこぼれだと、猿なのだ……私自身が認めてしまった様な気がした。

「アタシはそうは思わないっすけどね。」

「だけど、兄貴は私の言葉を真っ向から否定した。」

「……え?」

「お嬢さん、名前は?」

「えつと……ま、真希……」

「真希さん……良い名前っすね。それでね真希さん、ボクが思うに、真希さんのそれは天与呪縛じゃないっすか?」

「……うん。」

天与呪縛「フィジカルギフト」、並外れた身体能力の代わりに、呪力が無い。そのことを兄貴に話すと、兄貴は「やっぱりか。」と、一つ大きなため息を吐いた。

「何だよ……やっぱりあんたも、私のことを猿って思うのかよ。」

「なくんでそうなるっスか……真希さん、アナタのそれ、はつきり言う  
と天賦の才ですよ。」

「……………え？」

想像しない返答に、私は思わず固まった。この男は今、何て言った  
？天賦の才？呪力も無く、呪霊すらも見えない、こんな天与呪縛が？

「真希さん、呪術師として求められる能力は何か分かります？」

「えっと……それは」

「呪霊を祓える力っス。」

「っ……………」

そんなことは解ってる。だから呪霊の見えない私は、その能力すら  
無いということ、こいつは解っているのか。私は目の前の男を睨み  
つけた。

「そんなに見つめないで下さいよ。恐らく真希さんは、呪霊が見えな  
いから、それすらも出来ないって言いたいんでしょう？」

「アタシが言いたいのは、そこじゃ無いっス。」

「寧ろその逆。真希さんは、他の人達と比べて前の方でスタート出来  
るって思ってるんすよ。」

「……………は？」

「呪霊が見えない？呪力が無いから呪霊を祓えない？そんなもの、呪  
具を使えばどうとでもなるっス。それこそ、呪力や術式を持っていて  
も呪霊を祓えない術師なんてのもごまんといます。」

「それにね真希さん、アタシは以前、真希さんと同じ天与呪縛を持った  
方と一度、戦ったことがあるんす。」

「!？」

「その方は、呪力も術式が無いからこそその闘い方で、そしてその刃は最  
強すらも一度殺してみせました……敵だったんですが、彼の強さには  
憧れました。だから真希さん、アナタは強くなれる。最強にも届き得  
る刃にもなれた彼と、同じ才能を持った真希さんなら、大切なものを  
護りたいと思う心を持っている真希さんなら……」

兄貴の言葉に、私は大きく目を見開いた……天賦の才だなんて、強  
くなれるなんて、生まれて初めて言われた言葉だった。

「真希さん……う？」

「ぐすっ……」

「?!?!」

「うっ……ひぐっ……ぐすっ……うええ……」

「うわあっ?!真希さんっ?!泣いてるんスか!!アタシ何か気に障ること  
言ったっスか!」

「ちっ、ぢがうくくっ……!!」

違う……そうじゃ無いんだ……嬉しかったんだ……その言葉一つ  
一つが、私という存在を肯定してくれるもので……それはまるで、私  
に生きてても良いって言ってくれているようで……

「ひぐっ……うわあああああんっ!!」

私は、目から溢れ出した涙を、止めることが出来なかった。

「落ち着いたっスか真希さん？」

「ぐずっ……うん。」

一通り泣いた後、私は兄貴に抱き着いていた。兄貴が私の背中をポン  
ポンと叩くのが心地良くて、かなり恥ずかしかったけど、そんな羞  
恥心よりも心地良さを優先した。

「いや、それにしても嬉しいっスね。」

「……………何がだよ。」

「初対面の子に、ここまで懐かれたことがっスよ。アタシって良く胡  
散臭いとか言われて警戒されちゃいますから。」

「ああ、確かに。」

「ちよっ！酷いっスよ真希さん！」

「プツ！冗談だよ。」

思わず吹き出してしまう。心から笑ったのなんて何時振りだろう。気が付けば私は、兄貴のことを心の底から信用していた。

「……………ねえ真希さん？」

「ん？何だよ？」

「真希さんは、この家から出て行きたいとか思わないっすか？」  
「!?」

兄貴からの突然の言葉に、私は目を見開いた……………そんなの

「出て行きたいに……………決まってるだろ。」

私達のことを、両親でもすらも人とも思わない……………毎日毎日息が詰って、息の仕方すらも忘れてしまう。頼れる人ら真依以外なくて、生きた心地なんてこれっぽっちもしない。

「こんな家なんて……………大っ嫌いだっ……………!!」

「……………うん、そうっすよね。」

兄貴はそう言って私の頭を優しく撫でながら、そのまま話を続けた。

「真希さん……………真希さんさえ良ければなんですけど、アタシの所へ来るつもりはありませんか？」

「……………え？」

「勿論っ！真希さんのことが心配で、其処でアタシを監視している妹さんも一緒ですよ。」

「えっ！まっ真依っ!？」

「お姉ちゃんっ!!」

何時から居たのだろうか、廊下の角からオズオズと顔を覗かせていた真依が私に向かって一直線に抱き着いてきた。

「ごめんなさいっ！お姉ちゃんごめんなさいっ!!私つ……………私つ……………!!」

おそらく真依が謝っているのは、使用人達に虐められていた私を助けられなかったことだろう。別に謝る必要なんて無いのに……………

「良いんだよ真依。心配してくれてありがとな。」

私はそう言って真依の頭を撫でた。本当に、真依が無事で良かった

……

「いや、美しき姉妹愛っスね。」

「うん、私の自慢の妹だ……ええと。」

「喜助っス。藍染喜助。出来れば下の名前で呼んで欲しいっス。」

「そっか……なあ喜助さん。」

「なんですか？」

「アンタの所に行ったら、私達は幸せになれるのか？」

私からの問いに、兄貴の表情が真剣味を帯びる。

「それは真希さんと真依さん次第っス。でも、少なくとも、こんな家の人達よりかは幸せに出来ると思います。」

「そっか……それじゃあもう一つ質問させてくれ。アンタの所へ行ったら、私は……強くなれるのか？」

「ええ、それは保証します。それにアタシ、真希さんにぴったりの先生を知ってますからね。」

「そう言い切った兄貴の目に嘘は無かった……そっか。なら私の答えは決まってる。」

「喜助さん、私達をアンタの所に連れてってくれ……私達を、この家から連れ出してくれ。」

私の言葉に満足したのか、兄貴は嬉しそうに笑って

「もちろんっス!!」

「そうやって私達を抱き締めた……それが、私と兄貴が出会った時の話……」

「それから兄貴に連れ出されてから、兄貴や恵の親父に扱かれて、今の私があるんだよ。」

「……………真希さんにも、そんな過去があつたんだ。」  
「まあな。」

釘崎の顔色が優れない。それもそうだろう……………俺だって、真希さんと初めて会った時には、そんな過去があるなんて知らなかった。だって、初めて会った時の真希さんと真依さんは、そんな過去があるなんて思わないくらい……………

「あの……………すみません真希さん……………」

「あ？何だよ野薔薇。」

「真希さんは……………その、喜助さんに連れ出せて貰って、幸せだったんですか……………」

「は……………？お前今の話聞いて分かんなかったのか？」

真希さんは、釘崎からの問いに、呆れながらも笑顔で答えた。

「そんなもん……………幸せだったに決まってるだろ？」

ああ、そうさ……………幸せだったんだよ……………



『真希さん真依さん、今日は何処に行きましたよつか?』

『遊園地っ!!』』

『おっ、意見が揃ったっスね。それじゃあ今日は遊園地に行きましようか。』

『やったー!!』』

何時でも私達のことを最優先に考えてくれた。

『重心の移動が遅いつ!そんなんじやすぐに殺られますよっ!!』  
『分かってるよっ……!!』

修行の時には厳しかったけど、その後にはアイスなんか買ってくれたりもした……

『真希さん、これあげるっス。』

『何だこのダセえ眼鏡?』

『酷いつ!?アタシの自信作なの!!』

『はあ?このダサイ眼鏡が?』

『泣くっスよ?まあいいか。取り敢えず着けて見て下さい。』

『たくっ、分かったよ……てこれ。』

『名付けて呪霊ガミエクル君です!どうっスか?見えるようになりますました?』

『見た目だけじゃなくて名前もダセえのかよ……まあ見えるけど……』

『それは良かったっス!』

『……………ありがとな。兄貴。』

『えっ!?今真希さんなんて言ったっすか!?』

『うっせバーカバーカ!!』

本当に幸せな毎日だった…………

ああ、本当に…………幸せだったんだ。

『え……………兄貴が……………死んだ……………?』

あんなことが……………起こるまでは……………

場面は変わり里桜高校……………母を喪い復讐に取り憑かれた少年こと吉野順平、そしてその復讐を止める為に対峙していた虎杖悠仁は窮地に追い込まれていた。

馬鹿か俺は!!継ぎ接ぎ顔の人型呪霊!!ナナミンが言ってたまんまじゃねえか!!

巨大な腕に取り押さえられ、身動きの取れなくなった虎杖、そしてその目の前で呆然としている順平に、一体の呪霊が静かに歩み寄る。

虎杖悠仁は知っている。呪霊の狡猾さを、残忍さを……

「逃げる順平!!コイツとどんな関係かは知らん!!けど今は逃げてくれ!!頼む!!」

虎杖の慟哭にも似た叫びに、順平は困惑した。吉野順平にとって、この呪霊「真人」は、自身に呪術を教えしてくれた師匠であり、自身の理解者足り得る存在。悪い人な訳が……

「順平はさ、まあ頭良いんだろうね。」

その時、順平の肩に真人が触れる。身体に触れられることなんて、指導を受けていた頃からよくされている……何てこと無い行動。ただ、この瞬間だけは、真人のこの行動に順平は酷い嫌悪感に駆られた。「でも熟慮は時に短慮以上の愚行を招くものさ。君ってその典型!!」

身体が……動かない。

「順平って、君が馬鹿にしてる人間の……その次くらいに馬鹿だから。」

何で……どうして……そんな疑問と絶望が、頭の中を埋め尽くす。味方だと思っていた。初めて出来た理解者だと思っていた……裏切り、蔑まれ続けた人生で、母以外に初めて出来た心を許せる人だと思っていたのに……

「だから……死ぬんだよ。」

ああ……僕は結局、裏切られ続ける運命だったのか……我ながら、クソみたいな人生だ……

その時だった。

「剃刀紅姫」

順平と真人の間に衝撃が走り、真人の腕が両断された。

「なっ!?!」

「うわあっ!?!」

「順平っ!!」

拘束が解かれた虎杖が順平に駆け寄り、斬撃が放たれたの方向に目を向けた。土煙のせいで冴えない視界の先から、カランカランと床を

軽く叩く様な音と共に、気配が近付いてくる。虎杖は直ぐ様、順平を自分の背後に隠した。

「アンタ誰だ。」

虎杖の問い掛けに答える様に、土煙がサアツと晴れる。其処に現れたのは、色の抜けたボサボサの金髪に、片手に杖、下駄に甚平という、パツと見た感じだとだらしの無きような格好をした男だった。

「見た所高専生ですかね？そんなに警戒しなくても、アタシはキミの味方っすよ。」

男はそう答えるが、虎杖はそれでも警戒を解くことなく眼前の男を睨みつける。虎杖悠仁はこれまで、実戦経験こそ少ないながらも特級に位置づけられる呪霊を4体見てきた。それに自身を指導している人間も、自他共に認める呪術界最強「五条悟」に、その相棒である「夏油傑」、そして現在任務を同行させてもらっている「七海健人」に「灰原雄」……

惨忍な猛者に命を狙われ、優秀な猛者に指導を受け鍛えられた虎杖悠仁だからこそ分かる。

この男は猛者である。恐らく、この場に居る誰よりも……と。

「順平を助けてくれたのは感謝してる。ありがとう。でも、急に出て来た奴に味方って言われて、はいそうですかって言える程、俺も馬鹿じゃねえよ。」

「あく……確かにその通りっす。うくん、どうすれば信用して頂けますかねえ……あつ、そうだそうだ。」

男は何を考えたのか、懐をゴソゴソと漁り出すと、そこから一枚のカードを取り出した。

「取り敢えず、自己紹介はこちらでお願いします。」

「えっ、あ……どうも。」

虎杖がカードに目を移す。それは自分もよく知っているものだった。

「これ……高専の学生証……」

其処に載っていたのは、その男の顔写真と名前……そしてもう一つの情報、それに虎杖は目を見開いた。

「とっ、特級っ!？」

「ええ、まあ不相応とは思ってますが……一応特級呪術師やらせてもらってるっス。」

「うわわ!!ごっごめんなさーい!!」

それはそれは綺麗なお辞儀……それもそうだろう。さつきまで敵意抜き出しで対峙していた男が、まさか高専の先輩で、更に等級も特級と来たもんだ。そこに胡散臭いだのだらし無いだの勝手に思ってしまった。あまりに無礼過ぎる行為。罪悪感が半端ない……穴があつたら入りたい……というか掘るか。

そんなことを考えながら、自身のフィジカルを無駄遣いしようとしている虎杖を、順平の問いが正気に戻した。

「悠仁、特級って?」

「スゴクツヨイヒト……」

「そ、そっか……というか何で悠仁はカタコトなの?」

「いや……さつきまでの自分に対する罪悪感が凄くて。」

「別に大丈夫っスよ。胡散臭いだのなんだの言われるのは慣れていきますからね。」

「いやほんつとスンマセン……」

男……藍染喜助の気遣いが心を抉る。まああの本人は気遣いでも何でも無く、この状況が面白かったから逃っているだけだ。やはり特級、こいつも例に漏れずクズである。

先程までとは打って変わり、カオスと化した空間……しかし虎杖は忘れていた。さつきまで自身が対峙していた呪霊の存在を。

「クッ!ククッ!!まさか特級呪術師が来るなんて……俺はツイてるなっ!!」

「っ!?!しまっ!!」

真人の刃物に変形した腕が虎杖へ迫る。突然のことに、流石の虎杖も反応が遅れてしまった。真人の腕が虎杖の腹部に迫る……間に合わない。虎杖は目を瞑った。その時だった。

「不意打ちとは物騒っスねえ……まあ、ボクも人のこと言えませんが。」

其処には先程まで自身の背後に立っていた喜助が、真人の腕を杖で受け止めていた。

「ツイてる……なんて言いながら、迷いなく彼を攻撃するんっスねえアナタ。」

「卑怯だと思うかい？」

「いいえ？弱い者から狙うのは鬪いの定石です。ボクだってそうする。」

弱い者……その言葉に虎杖は苦い顔をする。自分が弱いことなんて、分かっていたつもりだったが、こうもバツサリ言われるとやはり辛い。

「へえ？君は人間にしては気が合いそうだ。」

喜助の言葉に満足したのか、真人はニタリと笑みを深める。

「フツ……特級呪術師っていうのは、どのくらい強いのかな？」

真人は力強く踏み込み、喜助へと間合いを詰める……そして、喜助の腹部へと手を伸ばした。

「藍染さんっ!!」

虎杖は叫ぶ。真人に触れられるということが、一体どういうことなのかを知っているからだ。しかし、そんな悠仁に喜助は笑顔で答える。

「大丈夫ですよ悠仁さん。」

真人の手が、喜助の腹部に触れた。

「さて、君の魂は一体どんな形をしているのかな？」

「無為転変」

真人は惨忍に笑った……以前の七三呪術師との戦闘から学び、打ち込む呪力の量を増やした。これを喰らって無事に済む人間はいない……そう思っていた。

「……………何だ、コレ？」

「ね？だから言ったでしょう？大丈夫だって……さて、次はこちらの番です。」

目の前の男は、そう平然と言い放つと、片手に持った杖を真人に叩き付け、校外へと弾き飛ばした。

「えっ……?えっ?」

「ほら、悠仁さんもブーツとしないで!ラウンド2つスよ。」

「!!うっ、うすっ!!」

喜助からの言葉に、虎杖は急いで下へと飛び降りた。喜助はそれを見送ると、これまで呆然としていた順平に話しかけた。

「ああそれと順平さん……でしたか?」

「えっ……はい。」

「アナタのお母様は、生きてますよ。」

「……………え?」

「まあ、この話は後でっス。それじゃ!!」

「えっ!?!ちよつまっ……!!」

喜助は言いたいことだけ言って、虎杖の後を追い、運動場へと飛び降りた。

運動場へ飛び降りた虎杖は、直ぐ様真人を祓うべく駆け出した。だがしかし、やはり特級呪霊……虎杖相手では祓い切れない……真人の攻撃が再び虎杖に迫る。しかし、これもまた新たに駆けつけた助っ人に阻まれた。

「大丈夫ですか虎杖君。」

「ナナミン!!」

「説教は後で、無事で何よりです。現状報告を。」

「あ、うん。無傷なのは、ナナミンの他に助けに来てくれた人のおかげ  
なんだけどね。」

「助けに来てくれた人？」

「あれ？ナナミン知らないの？その人特級みたいだけど。」

「……………五条さんか夏油さんが来たのですか？」

「違う違う。確か藍染って人だけど。」

「……………何？」

虎杖の言葉に、七海は目を見開いた。

「この状況で、その冗談は笑えませんかよ虎杖君。」

「いやマジだって！ほらコレツ!!」

虎杖はそう言って、先程渡された学生証を七海に見せた。

「……………これは。」

学生証を渡された七海は、あり得ないようなものを見るような目で  
それを見つめた。

「虎杖君……………これを何処で……………」

「だーかーらーっ!!」

「アタシが渡したんスよ。」

「っ!!」

背後からの声に、二人は一斉に振り向いた。其処に現れた喜助に向  
かって、虎杖は駆け寄り、七海は信じられないと言った表情をしてい  
る。

「貴方は……………」

「なあ聞いてくれよ藍染さん！ナナミンってば酷くね!?証拠まで見せ  
たのに疑ってくんのだ!!」

「ナナミン……………?」

虎杖の言葉に、今度は喜助が目を見開いた。喜助はその見開いた目  
を七海の方へ向けると、恐る恐る問い掛けた。

「もしかして……………建人さん……………っスか？」

「藍染……………先輩……………」



私は人生において、悔やんでも悔やみきれない後悔がある……それは、私にとって唯一、信用も信頼も尊敬もしていた先輩のことだ。

藍染喜助……それがその先輩の名前だ。禪院家の分家である藍染家の当主であり、呪術界を震撼させた最悪の呪詛師の息子……高専に入った当初に聞いた情報はこんなもので、当然最初の評価は最悪だった。

『アナタ方が新入生ツスか?』

そう言っただけで私達の前に現れた先輩は、髪もボサボサで眼の下にも隈を浮かべており見窄らしい。口調もおちやらけており、何処か胡散臭い……はつきり言って、第一印象は最悪だった。

五条さんや夏油さんからも話をされたが、藍染先輩はいつも単独で任務を熟しているという。協調性に欠け、自己中心的、やはり蛙の子は蛙だと、五条さん達は言っていた……前者二つは、貴方達が言うかと思っただけ、あのクズ二人がここまで言う程のクズ……私の藍染先輩に対する評価は更に悪くなった。

だが、人からの話を真に受けて、藍染先輩という一人の人間と向き合わなかったあの頃の私は、余りにも子供過ぎたと思いきや知らされた。それから一年後……私は一緒に任務を受けていた灰原と共に、命の危機に陥った。

「クソツ……！このどこが二級案件だ……こいつは土地神つ、どう考えても一級案件だ……！！」

恐らくは上層部の五条さんに対する嫌がらせだろう。私達が受けた任務は、明らかに等級違いのものだった。

「ハア……ハアツ……！！七海、此処は僕が食い止めるっ！七海はその内に先輩達に連絡を……！！」

「馬鹿を言うな灰原っ！！そんなことをしたらお前がっ！！」

灰原は自分を犠牲に私を逃がそうとするが、冗談じゃない。こんな

くだらない理由で同期を死なせてたまるか。私は灰原の隣に立ち灘を構える。そんな私達が面白いのか、目の前の呪霊は不気味な笑い声をあげ、その腕を振り下ろした。

「クソツ……!!」

速い……反応が出来ない……死ぬ。そんな考えが頭を過ぎった瞬間だった。

「啼け 紅姫」

その人は颯爽と現れた。

「藍染……先輩……」

「すみません……遅れてしまいました。よく耐えてくれましたね……後はアタシに任せてください。」

先輩達の中でも、一番来ることの無いだろうと高を括っていた先輩の登場に、私は目を見開いた。

「な、何故……」

私達を助けに来てくれたのか……これまで先輩を侮辱してきた私達を……とそう言おうとした私の言葉を先輩が遮る。

「何故かって……それは当然でしょう？アナタ達はアタシの大切な後輩なんですから。」

先輩の返答に、私は更に驚いた。大切な後輩だって？噂のみで先輩を最低な人間だと決めつけていた私達を？だが先輩の私達に向ける眼は、嘘偽りの無いもので、それに先輩は本心で言っているものだと確信した。

「さて、それじゃあ建人さんに雄さん。少し下がってくれますか？直ぐに終わらせますんで。」

先輩は、それだけ言うと言霊の方へ向き直った。

「そういうことっす。ちやつちやと終わらせて貰いますよ。」

「縛道の六十一 六杖光牢」

先輩がそう唱えた瞬間、呪霊が六本の光の板で挟まれ動きを止める。すると先輩はすかさず呪霊に向かい掌を向けた。

「アタシの術式は鬼道、簡単に言うと言力を攻撃と防御、拘束に使うことができません。破道で攻撃、縛道で防御や拘束を行います。更に言う

と、この破道・縛道には決められた詠唱があり、述式の発動の際に詠唱を行うことで述式を強化することができます。」

「さて、術式の開示も済みましたし、そろそろ終わりにさせてもらいます。」

「散在する獣の骨 尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪

動けば風 止まれば空 槍打つ音色が虚城に満ちる」

「破道の六十三 雷吼炮!!」

先輩が詠唱を唱え終わった瞬間、先輩から放たれた雷を纏った衝撃波。それは容赦なく呪霊を包み込むと、辺りの木々諸共呪霊は跡形も無く消し飛んだ。その光景に、思わず私は息を呑む。

「これが……特級呪術師……」

「す、凄い……」

五条さんや夏油さんもそうだが、私達と特級を冠する人達の実力はこうも離れているのかと、呆然としてしまう。

そんなことを考えていると、先輩は私達の元へゆつくりと歩み寄ると、目線を合わせるように私達の前で膝をついた。

「お待たせしました。さて、傷を治しましょうか。」

先輩はそう言っ、私達の傷口に手を添える。

「これは……反転術式……」

「先輩って、反転術式も使えるんですね……」

「はい。アタシ達呪術師は、いつ死ぬか分かりませんからね。万一の場合に備えて身に付けた能力ですが、今日初めて人に使いましたが、成功したみたいで良かったです。」

初めて……そう言った先輩の表情には、微かながら悲しみの念が読み取れたが、今の私はそれを気にする余裕は無かった。

目の前で見せられた圧倒的な戦闘力の差、今されている反転術式……攻防共に抜け目ない先輩のそれに、最近最強に至った五条さんのことを思い出した私は、空を仰ぎ大きく息を吐いた。

「……もう、貴方と五条さんの二人だけで良くないですか？」

「七海……」

思わず出て来た言葉に、私はハツとなって口を塞いだ。藍染先輩

も、今の言葉に驚いたのか、少し目を見開いている。

違うだろ。私が今言わなければいけないことは、それじゃないだろ。

「す、すみません……」

私の謝罪に、先輩は怒るわけでもなく、笑みを浮かべた。

「謝らないでください。先程の呪霊を見て分かります。恐らくは等級違いの任務を当てられたんっスよね？一応聞いておきますが、自ら志願したんですか？」

私は静かに首を振ると、先輩は「そうっスか。」と怒気を含んだ声で呟いた。

「それで建人さん、先程アナタが仰ったことですが、アタシはそうではない……と思います。」

「……それは何故」

「アタシ達呪術師は、呪霊を祓い非術師を護ることを生業にしています。それは、分かりますね？」

「……はい。」

「アタシも五条さんも特級です。アナタ方の祓えない呪霊も祓えるでしょう。」

「っ!!」

先輩の言葉に苛立ちが募る。この人は先程言ったことを聞いていたのか？だから私は言っているのだろう。貴方達だけで良い……と。

「嫌味……ですか？」

「いいえ、アタシは事実を言ったまでです。」

「だったら!!」

「ですが、アタシと五条さんだけじゃ、救える命に限りがあります。」

「!？」

「呪霊は、強いものを祓っただけじゃ終わりません。どっちかと言うと、今現在起こっている怪奇事件による行方不明者や死傷者の殆どは、等級の低い呪霊によるものが殆どです。だからアタシは、建人さんや雄さんには感謝してるんっスよ？アタシだけじゃ救えなかった命を護ってくれてるんですから。」

「……………」

この時の私は恐らく、信じられないものを見るような目で先輩を見ていたと思う。だって、その先輩の姿や言動は、噂で聞いていた姿とは正反対だったから。

帰り際、「このことは他言無用でお願いします。」と言い残し、私達の前から姿を消した先輩が居た場所を見つめながら、灰原は私に話し掛けた。

「ねえ七海……藍染先輩って、僕達が思ってた人と全然違ったね。」

「……ああ。」

「ねえ七海、結局藍染先輩って、噂通りの人なのかな……」

「……………そんなの決まってる。」

「私達が今見た先輩が、本当の先輩だろ……」

「……………うん、僕もそう思うよ。」

私達は会話を切り上げると、高専へ帰るべく帰路についた。

その日を境に、私と灰原の先輩との交流が増えた。その中で分かったことは、噂で聞く先輩と、実際の先輩は全くの別人だと言うことだ。確かに軽口は多いが、その軽口の裏ではいつも、私達の安否を気遣い、仲間を大切に思っているということが分かる。

実際、先輩は最近任務の増えた夏油さんの任務を、本人には内密で肩代わりしているし、家入さんに対しても、大量に運ばれて来た患者の半分を先輩が治療している。

……まあ、本人達は全く気が付いて無かったが。先輩を見ていると、一体いつ寝ているのか疑ってしまうくらいには多忙な毎日だ。私達を助けた時の見窄らしい姿も頷ける。

そして私が驚いたのは、あの噂を先輩が全く否定しないことだ。本人からすれば、事実とは正反対の噂を流されて溜まったものじゃ無いだろうに、先輩は何故かそれを否定しない。

私は一度、何故否定しないのか、こんな噂を流されて悔しく無いのか聞いたことがある。それに対し先輩は

「アタシには、絶対に殺さなきゃいけない人がいます。ソイツを倒すためには、仲間を作るわけにはいかないんですよ。だからアタシに

とって、この噂は丁度いいんですよ。」

そう言つて笑っていた。その言葉には、先輩の覚悟が詰まっていた。

恐らく先輩の言っている人物は、先輩の父親のことだろう……そして私はその時理解した。

この人は死ぬつもりなのだ……

最悪の呪詛師と呼ばれた先輩の父親……その人物を殺す為に、先輩は人との繋がる術を捨てた。ありのままの先輩を知れば、きつと五条さん達も絆されていた筈なのに……呪詛師に堕ちた父親のせいで、先輩は与えられた筈の未来を全てかなぐり捨てている。

そしてそれは、私の力ではどうすることも出来ないことなのだ……握りしめた拳に力が籠もる。

だが……一つの巨悪を祓う為に、己の全てを投げ捨ててでも抗うその姿は、間違い無く呪術師の鏡であり、その姿に私は憧れてしまった。

「藍染先輩……私は、先輩には死んで欲しくありません……」

私の言葉に、先輩は困った様に笑った。

死んで欲しく無い……先輩も灰原も、この腐った呪術界では絶滅危惧種のような人種で、そんな人が死ぬのなんて耐えられないんです。

その日から藍染先輩は、私にとっての目標となり、唯一信用も信頼も尊敬もしていた先輩となっていた。

だが私は忘れていたんだ……この腐った世界では、善人から直ぐに死んで行く……と。

その日先輩は、夏油さんと合同任務に就いていた。出発前の夏油さんの凄く嫌そうな顔を見て、本当の先輩を知らないくせにと苛つき、怒鳴りそうになったが、藍染先輩に止められて何も言えなかった……。今思えば、あの時先輩を振り切っても、先輩の本質を皆に伝えていれば、あのようなことが起こることは無かったと思う。

……それが、先輩の覚悟を否定することになったとしても。

任務自体は直ぐに終わったのだろう。その日の夕暮れには先輩達を載せている車が高専前に停まっていた……。其処には珍しく眠っている夏油さんと、恐らく任務先から連れ帰って来たのだろう、夏油さんと同じく眠っている幼い女の子二人が乗っていた。

だが、其処に藍染先輩の姿は無かった。

それに焦った私は、呑気に寝こけている夏油さんを叩き起こし、藍染先輩の所在を聞くべく詰め寄った。

「夏油さんっ！先輩はっ、藍染先輩は一体何処にっ!!」

「うん……。っ？どうしたんだい七海？そんなに慌てて君らしくない。」

「今はそんなことどうでもいい!!私は先輩が何処に行つたのか聞いているんです!!」

「途中までは一緒に居ただけで、車に乗っている最中に寝てしまつてね……。すまないが分からないんだ。」

「チツ……。!!」

特級である夏油さんが、任務帰りだとしても途中で寝るのなんてあり得ない……。恐らくは藍染先輩が何かしたのだろう。途轍もなく嫌な予感がする。

「しかし七海、別に良いんじゃないか？」

「……は？」

夏油さんの言葉に、思わず声が低くなる。

「彼の単独行動は、別に今に始まったことじゃないだろう？自己中心的な男さ。勝手に何処かに行ったのだって、特に理由も無いだろう。」

この人は、一体何を言っているんだ？先輩が自己中心的？違うだろ。何で私よりも先輩と居た時間の長い貴方達が、こんなにも先輩のことを知ろうとしないんだ。私は怒りで目の前が真っ赤に染まった。

「貴方はっ!!」

私が先輩に掴み掛かろうとすると、高専から夜蛾先生が駆け出して来た。

「傑っ！喜助はどうしたっ!!」

夜蛾先生はそう叫ぶと、夏油さんの肩を掴んだ。

「ど、どしたんですか先生？彼は高専へ帰る途中で、何処かに行っちゃったようですが……」

夏油さんがそう言うと、先生の顔から一気に血の気が引いた。

「いいからお前達、落ち着いて聞いて欲しい……」

夜蛾先生が口を開く……嫌な予感が脳を過る。まさか……

「喜助が……藍染惣右介と今、戦っている。」

その言葉を、私は信じたく無かった。

急いで現場に駆け付けた時には、もう其処には既に絶望が広がっていた。辺りに飛び散った血痕……そして、水溜りかと錯覚してしまう



くらいに流れ出た血の中心で、刀を貫かれた先輩……そしてその刀の持ち主であろう呪詛師の姿が其処にあった。

「先輩っ!!」

私と灰原は叫び、急いで先輩の元へ駆け出そうとしたが、それを夜蛾先生に阻まれた。

「退いて下さい先生っ!このままだと先輩がっ!!」

「駄目だっ!あいつは……惣右介はここに居る誰も手に負える相手じゃない!!」

「それでもっ!先輩は僕達の命の恩人なんですっ!!」

「待ってくれ灰原、一体どういうことだい?君達の命の恩人って……」  
「その話は後にして下さいっ!!」

夏油さんが灰原に事情を聞こうとしたが、今はそんなことどうでもいい。そんなよりも先輩だ。刀に刺された先輩はピクリとも動かず、生きているのかも死んでいるのかも分からない……

「お願いします夜蛾先生っ!!」

「……………」

「どうして行かせてくれないんですか!!もしかして貴方もっ!先輩の噂を鵜呑みにしているのですか!!」

私の言葉に、灰原を除いた全員が、背後で息を飲みのが分かる……その事実には、思わず握る拳に力が籠もり、爪が皮膚を突き破り血が流れる。

「何故ですっ!貴方も仮にも教員でしょう!?!そんな貴方がっ!」  
「そんな訳無いだろうっ!!」っ…………!!」

「あいつの非ぬ噂が流れていたのも知っていた!!勿論、止めようともしたっ!!…………だが、あいつが言ったんだ。やめてくれ…………とな。」

「藍染惣右介の術式は俺もよく知っている……」「鏡花水月」、術式の発動を相手に視認させることで、相手の五感全てを自身の完全催眠下に置く……それがあいつの術式だ。」

「ハッ!何だそれ?雑魚術式じゃん。」

五条さんは鼻で笑うが、それを先生は即座に否定した。

「それは違うぞ悟。完全催眠に置くというのは、脳を騙すと言うこと

だ。術師にとって、脳を騙されるということは、即ち術式を乱される……それが命取りになるということは、お前達ならよく分かるだろう……」

「!?」

初めて知る呪詛師 藍染惣右介の術式……先輩は、そんな奴を相手取っていたのか……

「だったらー!だったら何でそれを俺達に知らせなかったんだよ!!」

「知っていれば、何か対処が出来たか?奴を倒せていたのか?」

「クツ……!!」

「良くも悪くも、惣右介の狙いは初めから喜助のみだった。だから喜助も、任務を単独で行い、お前達に被害が出ない様にしようとしたのだろう。」

「そんな……そんなのって……」

灰原の顔から血の気が引く……いや、灰原だけじゃ無い。この場に居る全員が、現実を直視出来ずにいるのだろう……特に酷いのが五条さん達三年生だ。それもそうだろう……三年も一緒に居た筈なのに、噂で聞いた表面上の藍染先輩しか知らず、その裏側にある先輩の本質を理解しようとしなかったから。

堪らず五条さんが藍染先輩の元へ向かおうと走り出した。

「喜助っ!!」

五条さんは先輩に手を伸ばそうとするが、それは見えない壁の様なものに阻まれた。

「っ……!!何だよ……コレッ……!!」

すると、私達の存在に気付いたのか、呪詛師の眼が私達を捉えた。「おや。漸く来たようだね。すまないが、君達が侵入出来ないように結界を張らせてもらったよ。君達は其処で、この男が死んで行く姿を見ているといい。」

「惣右介っ……!!」

「久し振りだね正道。相変わらず元気そうで安心したよ。」

「お前っ……!!何故息子を手に掛けたっ!!」

「愚問だな正道。それは前にも言っただろう?大いなる計画には、多

少の犠牲も厭わない……と。」

「お前はそんな男じゃ無かった筈だろう!!俺の憧れたお前はっ!!」

「それも昔言った筈だ。二度も言わせるな……憧れとは、理解から最も遠い感情だ……と。」

これが最悪の呪詛師……藍染惣右介。その身体から発される呪力に、身体が押し潰されてしまいそう。一瞬で理解した。この男は、生物としての格が違う……恐らくは五条さんでも、この男には勝てないだろう。

その時、先輩の指がピクリと動いた。

「先輩っ!!」

「っ!!先輩っ!!」

「な……んで、来ちゃったんですかね……」

先輩の、掠れ小さくなった声が鼓膜を揺らした。

「喜助っ!俺が今からこの結界壊してやっから!!だから頼むっ!それまで耐えてくれっ!!」

「そうだっ!私達最強が居れば、そんな男一瞬で倒せるっ!!だからっ!」

「生きて帰るんだっ!!」

そう叫んだ最強二人に、臃げな先輩の目が大きく見開いた……だが先輩は、何処か嬉しそうに笑うと、その瞳に悲しみを浮かべた。

「やめて……下さいよ……せっかく……覚悟した……のに……最期の最期に……決心……揺らいじゃうじゃ……ないっすか……」

最期……その言葉に目の前が真っ白になった。

「先輩……止めて下さい!!貴方は死んで良い人間じゃ無い!!」

情けなくも緩くなった涙腺を、どうにか引き締めて私は先輩に叫んだ。止めてくれ……死なないでくれ……非ぬ噂に翻弄された優しい人が、こんな死に方をするなんて許されて良い訳がない。だが、私の言葉とは裏腹に、先輩は詠唱を始めた。

「雷鳴の馬車 糸車の間隙 光もて此を六に別つ」

「縛道の六十一 六杖光牢」

六本の光の板が、先輩諸共藍染惣右介を包む。

「縛道の六十三 鎖条鎖縛」

間髪入れずに先輩は術式を発動する。先輩から放出された太い鎖が、先輩と呪詛師に絡みついた。

「成程、縛道で自身諸共私を拘束するか。だが、それでは倒せ無いことは、君がよく知っているのではないのかな？」

「ええ……勿論……アタシもそんなこと……理解してますよ……」

「破道も効かず……縛道も効かない……そんなアタシに……残された手が……あと一つだけ……あるんですよ……」

「……………何だと？」

「縛道の二十六 曲光……解除」

「……………これはっ……………!?!」

其処に現れたのは二本の柱……何に使う物なのかは分からないが、急に焦りだした藍染惣右介を見ると、只の柱では無いのだろう。

「……………ここまで……気付かないように……立ち回るのには苦労しました……でも良かったっス……アナタが……気づかなかったお陰で……これが使える……」

「貴様っ……………!?!」

焦る藍染惣右介に、それを見て安心したように頬を緩める先輩……先輩は詠唱を始めた。

「我が右手に境界を繋ぐ石 我が左手に実存を縛る刃」

「貴様っ……………!!喜助っ!!お前は分かっているのか!?この呪術界の腐敗をっ!!」

「黒髪の羊飼いや 縛り首の椅子」

「私は貴様を蔑如するっ!ここまででの知能と技術がありながらっ!!何故それを呪術界の改革の為に利用しない!!」

「叢雲来たりて 我・鴉を打つ」

詠唱が終わったのだろうか……空間が裂け、其処に先の見えない闇が広がる。

「呪術界の改革ならしてるっスよ……アナタを祓うことです。」

「きつ……貴様アアアツ……………!?!」

『もし、ボクがアナタの息子じゃなかったら……ボクも彼らと馬鹿

やって笑い合えていたのかもしれないね……』

空間はまるで呼吸をする様に、辺りの空気を吸い上げ始めた。

「藍染先輩っ!!」

私は結界を力一杯叩き付け、先輩の名を叫ぶ。すると先輩は、私へと目を向けると、優しく目を細めながら笑った。

「後のことは頼みましたよ……建人さん。」

その言葉を最期に、先輩は藍染惣右介と共に闇の中に吸い込まれて行った。

バキイツ!!

先輩が闇に消えた後、空間に出来た裂け目が閉じ、その空間を形成していたであろう柱と、私達を阻んでいた結界が音を立てて崩れ落ちた。

その日……藍染先輩は、私達の元から姿を消した。

先輩が姿を消した後、高専へと戻った私達は、夜蛾先生から藍染喜助という人間の真実を聞いた。やはり先輩に関する噂は、全て嘘でたらめだった。それを知った五条さんや夏油さんは、夜蛾先生に掴み掛かろうとしたが、私は夜蛾先生の前に立ち、その二人の行く道を塞いだ。二人は「何故喜助のことを教えてくれなかった。」とか「そのことを知っていたら、私達だって。」とかほざいていたが、自ら知ろうとしなかったのは先輩達であり、藍染先輩を追い詰めたのも先輩達でしようと言うと、二人は悔しそうに下を向き、家入さんも思う所があるのだらう普段血色の悪い顔を更に青くしていた。

そんな中、二人の女の子が、夏油さんの元へ駆け寄ってきた。

「あの……夏油様……」

「……どうしたんだい？美々子、菜々子……」

「あの……これ……藍染様から貰ったの……夏油様につて……」

「!?……喜助が……?」

夏油さんが、恐る恐る美々子と菜々子と呼ばれた女の子達が持つている袋と機械を受け取る。袋の中を確認すると、其処には大量の飴玉と一通の手紙が入っていた。

「……これは」

手紙を読んだ夏油さんは、徐ろに袋から飴玉を取り出し口に含み、懐から呪霊玉を取り込むと、それをゴクリと呑み込んだ。あまりに突然の行動に、その場に居た全員が夏油さんに視線を寄越し固まっていると、夏油さんの瞳から大粒の涙がボロボロと流れ始めた。

「味が……しない……」

「は……?何言っただだ傑……」

「味がっ……しないんだよっ!!」

夏油さんはそう言っただださんの両肩を強く掴み揺さぶった。夏油さんの話によると、呪霊操術によって呪霊を取り込む際に出来る呪霊玉はとても食べたものでは無いらしく、本人曰く吐瀉物を処理した雑巾の味がするとのことだった。五条さんも初めて聞いたのだろう。その碧眼を大きく見開いている……当然だ。五条さんにとって唯一無二の親友が、そんな苦しみを抱えていたなんて、想像も付かなかったのだろう。

唯一人、藍染先輩を除いて……

五条さんが最強に成ってから、藍染先輩は夏油さんのことを特に気に掛けていたらしい。呪霊操術のことを調べ、そのデメリットを知り、そのデメリットを払拭する為に開発したのだろうと夜蛾先生は言った。

それだけじゃ無い。家入さんにも先輩は、負担を少しでも減らそうと、運ばれてくる患者の半分近くを請け負っていた……五条さんにも、親友を失わせない為に、五条さんに対する嫌がらせで割り当てら

れた夏油さんへの任務を、先輩は一心に引き受けていた。

それを聞いた夏油さん達は膝から崩れ落ちた。

全てが遅すぎた……非ぬ噂に翻弄され、藍染喜助という人間の本質を少したりとも見ようとしなかった……その結果、先輩は独り死んで行った……

ああ本当に……呪術師なんて、クソだ。

あれから十年……一度呪術師を辞めた私だったが、何の因果かまたこの腐った世界に戻って来てしまった。虎杖君には同じクソなら、より適正のある方をなど言ったものの、やはり私も先輩の居たこの世界を見捨て切れなかったのだろう……とんだお笑い草だ。

先輩は死んだ……そう割り切っていた。

「もしかして……建人さん……っスか？」

「藍染……先輩……」

そこに現れた、あの日と変わらぬ容姿の先輩……

まさか……こんな日が来るなんて、夢にも思わなかったんだ。

皆さん、BLEACHという漫画をご存知だろうか？そう、黒装束

を身に纏ったキャラ達がオサレな台詞叫びながらドンパチやってるアレだ。俺は前世、この漫画にどハマリしていた。小学生の頃なんて友達との遊びで「卍っ解っ!!」なんて叫んでいたのは今では遠い記憶だし、気道の詠唱覚える為に、英単語暗記するのそっちのけで記憶力無駄遣いしたのなんて記憶に新しい。おかげで英語のテスト赤点だったけど……

突然であるが、俺……浦原喜助改め藍染喜助は転生者である。前世ではバリバリのヲタクで、何の恨みを買ったのか、背中から突然刺されて呆気なくポツクリ逝った。

いや本当に、一体何の恨み買ったんだ俺？年齢⇨彼女無しだったし、人見知りのコミュ障だったんだぜ？人に恨み持たれるようなことした自覚無いし、友達だって居なかったんだぜ？……あれ？何か言ってる泣きそうになってきたぞ？

……まあそんなことは置いといて、背中ブスツからの呆気なくポツクリ逝った俺何だが、目が覚めたらあら吃驚。ちっちゃなお手手にスベスベたまご肌……そう、俺は輪廻転生したのだ。

それから数年が経ち、一人でヨチヨチと歩き回れる歳になった頃、偶々見つけた鏡を覗き込んだ俺は、とんでもない事に気が付いた。

「ボク、もしかして成り代わってます？」

……と。日本人離れた色の抜けた金髪、子供らしく無い気怠げな目つき、名付けられた喜助という名前……そして無意識に変換されたボクという一人称に謎の敬語……

これ、浦原喜助ですよん!!というかつ！浦原さんの身体自己主張強すぎっ!!

その日、俺の叫びが屋敷に木霊した。

それから更に時が経つこと早数年。俺は無事？に中学生になった訳だが、ここまでで色々分かったことがある。まずはこの世界なのだ、滅茶苦茶幽霊おる。初めの頃はBLEACHに転生したのかと疑ったが、仮面も穴も無かったので、その考えは直ぐに捨てたが、おそらく此処が何かしらの漫画の世界らしいということは分かった。だって出たんだもの……赤火砲が……なーんか幽霊に襲われてる時



にノリで詠唱かましたら出ましたよ……ハイ。しかもぼっちし人に見られました。

その人が言うには、俺が消し飛ばした幽霊は、呪霊という人の負の感情が集まって出来たものらしく、それを祓うのを生業にしてる人達のことを呪術師って言うらしい……へえ……

……あれ？これもしかして呪術廻戦？

なんてこつたい！俺は膝から崩れ落ちた。

呪術廻戦っていや、あの推しが死ぬでお馴染みのトラウマ製造機じゃねえか!!やべえ俺死ぬ!?

更にやべえことに、俺の家系はどうやら呪術師の家系で、しかもそれなりに歴史のある家系らしく、俺が呪術師として生きるのは、もう完全に決まっているらしい。

俺は両手で頭を抱えると、そのまま天を仰ぎ見た……それから、俺の呪術師人生が始まった。

そこから俺が中学を卒業するまで、まあ色々と分かったことがある。まず俺の実家がどうやらあの禪院家の分家であること……：：：そのあの禪院。人権全無視クズ集団の巣窟でお馴染みのあの禪院家。神様、俺アンタに何かしました？

何回か実家代表で行ったことあるが、まあ人を見下すのがお好きなことで。多分だけど俺アンタ達より強いよ？こちとら浦原喜助スベックに特訓重ねてんだぞ？舐めんな？まあそのおかげで、真希さんと真依さんを家族に招き入れたけども。

次に分かったことだが、一番の問題がこれだ。俺の実家である藍染家なんだが、とにかく嫌われている。どうやら、家から最悪の呪詛師が出たようで、しかもそいつが俺の実父と来たもんだ。そいつの名前が藍染惣右介……いや、浦原喜助が藍染惣右介の息子の世界線って一体どんなクロスオーバーだよ作者頭おかしいだろ!!

しかも藍染惣右介の狙いは俺らしく、どうやらそれも藍染家の風習なりが影響しているらしい。それを知った上層部が、俺を孤立させる為に非ぬ噂流してるせいで友達なんか出来た試しが無い。まあ俺も、主要キャラ巻き込みたく無かったから無理に関わろうとはしなかつ

たが。

てな訳で、皆に避けられ続けた俺だが、時は進んで高専に入学した。ここでも噂のせいで周りから嫌われてた俺だったが、そのおかげで色々好きに動けた。奥さん絡みで関わりのあつた甚爾さんに一芝居打って貰つて、盤星教に理子ちゃんそっくりな義骸渡して死んだことにして救済することも出来た。

そんなこんなで何かと原作ブレイクして来た俺なのだが、三年になった時、思わぬ誤算が生じた。後輩である建人さんと雄さんに慕われてしまったのだ。いつも通り助けたら直ぐに去ろうとは思っていたのだが、建人さんの「あの人達だけでいい。」発言を無視出来なかった俺がいらねえこと話してしまった結果がこれだ。いやあ、やっちまったよね。その時の俺は、藍染惣右介倒す為に道連れ特攻決めようと思つてたから、友達いない方が楽だったんだが……まあ、建人さんと雄さんが周りに言っていないのが不幸中の幸いだったかな。

そのおかげで、最期まで皆に勘繰られることなく、藍染惣右介と心中出来たと思つていた俺だったのだが、どうやら再びこの世に舞い戻つて来たらしい……という訳で、何故か年齢はそのままに、十年後の世界に召喚された俺なのだが……

「うわあああああああああん!!!喜助が生きてるよおおおおお  
おお!!!」

「ひぐつ……えぐつ……ごめんよ喜助つ……ごめんよつ……」

「本当に藍染か……?本当に……?あつ、触れる……良かった……生  
きてる……ぐすつ……」

「先輩つ……先輩が本当に生きてるつ……!!七海つ!先輩が生きてる  
よつ……!!」

「……えーと?」

「一体……何がどうなってるんっスか?」

俺にこべりつきながらギャン泣きし、目隠しをぐしゃぐしゃに濡ら  
す五条悟に、同じくこべりつきながら呪文のように謝罪をしている夏  
油傑……俺の手やら顔やらをひたひたと触りながら、涙を流している  
家入硝子に、俺の頸動脈を的確に締め付ける形でホールドリ耳元で叫  
び散らす灰原雄……お前ら俺のいない十年で一体何があつた?

「建人さん?どうして皆さんこんなことになってるんですか?」

「貴方……それ本気で言ってますか?」

「あれ……?建人さん?どうしたんっスか?ネクタイなんか解いて?  
それに何で呪力が高まつてるんです?」

「いえ何、脳足りんな先輩に、目が覚めるような一発をくれてやろうか  
と……」

「え……?それってヤバイやつじや無いっスか?」

「安心して下さい。今の私なら新記録を狙えそうな気がします……黒  
閃の。」

「駄目だ会話が成立しない……ていうか」

「それ死ぬやつっスよね?!ちよつ!待つつス!!また死ぬのは勘弁っス  
!!」

「そういう発言が脳足りんだと言ってるんですっ!!」

「十劃呪法 瓦落瓦落!!」

「ぶべらっ!!?」

「いや本当にすみませんでした……」

いやマジで死ぬかと思った……建人さんマジで殴って来ましたやん……しかも本当に黒閃出たし。

「全く……どうして皆さんが泣いている原因が自分と理解出来ないのか……」

そう言つてため息をつく建人さんだが、そんなこと言つても仕方無くないか？

「死んだ所で影響無いでしょ？だってアタシ（俺）、嫌われてましたし……」

「……は？」

「あれ？」

もしかして今の、口に出てました？皆さんすっごいことなってるんですけど？建人さんと雄さんは人でも殺したんかって目をしてるし、さしず組なんてこの世の終わりかってくらい顔色悪くなってますよ？

困惑する俺の両肩を、建人さんと雄さんがガシリと掴んだ。肩から聞こえてはいけない音が鳴る。

「あの……建人さんに雄さん？二人とも顔が怖いっすよ？」

「二度とそんなこと言わないで下さい。」

「アツハイ」

即答した。後輩が怖かったです。

その後、建人さんと雄さんに俺の本当のことを話したことを説明さ

れた後、さしす組に再度泣きつかれた。

「別に説明しなくても良かったんですけどね……」

そう言った俺が、建人さんと雄さんに正座させられ徹夜説教コースに突入したのは、また別のお話。

「やるでしょ。サプライズ!!」

「あらお出向かけ? 気色悪い。」

「よし、兄貴の墓前に備えるものが出来たな。覚悟しろよ真依?」

「ちよっ!?! 止めなさいよ真希っ!!」

私の返しに何時もの様に焦る真依……こいつ毎回思うがチヨロすぎないか? というかお姉ちゃんって言えよ。

まあ今日の姉妹校交流会では敵ではあるけど、やっぱり実の妹とやり合うのは、ほんつつつつの少し気が引ける……まあ、思春期突入してから姉妹喧嘩しよっちゅうしてたけど、それも仲の良い証拠か。

「真希先輩久し振り〜!!」

「お久しぶりです……」

「おう、美々子も菜々子も久し振りだな。」

美々子と菜々子、兄貴が死んだ日に、兄貴と傑に救われたという血の繋がらない双子の様に仲の良い奴ら。同じ双子姉妹仲間ということで休日なんかは良くシヨツピングとかにも行ったりしてる。

どれもこれも、兄貴が居なければ有り得なかった未来だったんだよな……

そんなこんなで始まった売り言葉に買い言葉。こいつら暇かよ。早いとこ控え室言ってくんねえかな。

「はーい、内輪で喧嘩しない。まったくこの子らは……で、あの馬鹿は？」

「悟は遅刻だ。」

「悟（バカ）が時間通りに来るわけねーだろ。」

「五条の坊が時間通りに来たら、それこそ病気かと疑うだろ。」

「誰もバカが五条先生のこととは言ってませんよ。てか俺に起こされなきゃ遅刻してた奴が言うなクソ親父。」

馬鹿言え恵、この場においての馬鹿は悟か傑しかいねえだろ。

「てか歌姫先生こそ、あの馬鹿はどうしたんだよ。」

「あのクズも遅刻よ……全くあいつら……」

まさかバカをクズと変換されるとは思ってた。この人マジで大変だな……

私が歌姫先生に同情していると、噂の馬鹿共が、アホみてえにでけえ箱を乗せた荷台を二つ転がしながら現れた。

「おまたー!!」

「待たせてしまつてすまないね。」

「チツ……五条悟に夏油傑!」

歌姫先生が舌打ちを溢す。こいつらどんだけ嫌われてんだ? まあ、そんなことを気にも止めず私達に話し掛けてるところを見るに、こういう所なんだろうけど……

「やあやあ皆さんおそろいで。私、出張で海外に行つてましてね。」

「急に語り始めたぞ。」

「はいお土産。京都の皆にはとある部族のお守りを。歌姫のは無いよ。」

「いらねえよ!!」

「こら悟、そんなこととしてはいけないよ。すまないね皆……私は海外に行つていないから、大したお土産では無いのだけど、はいこれ。最近さr……信者から貰つた良く分からない人形だよ。あ、すみません歌姫さんの分は無いです。」

「だからいらねえよ!!」

こいつ今完全に猿つて言おうとしたな……ついでに生徒を廃品処理に使うなよこいつ等……

「そして東京都の皆にはコチラ!!」

そう言つて悟が勢いよく振り向くが、正直こつち見ないで欲しい。私達まで馬鹿と一括りにされるだろ。

「ハイテンションな大人つて不気味ね。」

野薔薇の的確なツッコみを余所に、悟の持ってきた箱がバゴツとデカイ音を立てて開いた。

「故人の虎杖悠仁くんであーっす!!」

「はい!!おっぱっぴー!!」

あ、恵と野薔薇が固まった。

私達の前に現れたのは、死んだと聞かされてた宿儺の器で恵達の同級生の虎杖悠仁だった。

固まった恵達以外は、あまり悠仁の登場に感心は無いようで、あるとすれば学長達だけ……それに困惑している悠仁に、箱を蹴り睨みつける野薔薇……なるほど、これが噂に聞くカオスってやつか。

「ていうか悟、もう一つの箱なんだよ？一発目に死んだ筈の奴が出てきたんだ。最後に残すってことは、更に碌でもねえやつが来るんだろ？」

「流石は真希っ！良い所に気が付いたね〜！」

そう言っただけで笑う悟だが、絶対に碌なこと考えていないのだけは分かる。

「それでは最後に東京と京都の皆さんにサプライズでえーっす!!」

悟の無駄に高いテンションと共に、もう一つの箱がバカリと開く……その中には。

「あれ？何で順平がそんな中にいるの？」

「僕に聞かないでよ……僕も師匠に急に眠らされて、目が覚めた時には既にここの中だったんだから……」

知らねえ奴が入ってた……

「あれ……？確かに僕、この中に入れた筈なんだけど……」

「それは私も見たよ……一体どうなってるんだ……？」

馬鹿共の会話を聞く限り、こいつ等も予想して無かったことが起こって困惑しているらしい。

馬鹿馬鹿しい……私がつめ息をついていると、急に真依と恵が、箱の中に入ってる奴の胸倉を掴み掛かった。

「アంతタ一体何のつもり？／お前、一体何のつもりだ。」

「ひいっ!!」

真依と恵の急な変わりように、私は驚いた。私だけじゃない、この場にいる全員がだ。だが、真依と恵が今にもそいつを殺してしまいうな様子に、私と甚爾が即座に動いた。

「おい何してんだ真依っ！」

「離してっ!!私はいっつも聞かないといけないの!!」



「お前もだ恵、急にらしくねえことしやがって。」

「うるせえ！お前は気付かねえのかよクソ親父!!」

「あ？何のことだ？」

「こいつからっ！兄さんの呪力の残穢を感じるのよ!!／んだよ!!」

「……………は？」

今……………こいつ等……………なんて言った……………？

「どういうことだ……………真依。兄貴は……………確かにあの時……………」

何かの冗談だろう……………冗談にしちや笑えないが……………だけど、真依と恵の目に嘘は無い……………

「……………おいお前。」

「はっはいつ!!」

「こいつらが言ってることは本当か？」

「えっ？」

「だから！お前から兄貴の呪力の残穢が残ってることだよ!!」

「ひっ！ぎっ残穢……………って……………何ですか……………？」

ビクビクして縮こまる姿に苛つきを覚えるが、言っていることに嘘は無い……………こいつ、呪術師としてずぶの素人か……………いや待てよ？

「お前……………さつき師匠がどうのって言ってたよな？」

「え……………うあつ、はい……………」

「師匠の名前は……………？」

「……………え？」

「だから師匠の名前は何だって聞いてんだ!!」

誰だ……………一体そいつは誰なんだ……………

心臓がバクバクと煩い……………もしかしてや何でといったを疑問符ばかりが脳内を行き交う。自慢の身体も、鈍った思考のせいで上手く動かせない。それでも、目の前の男が口にしようとする師匠と呼ばれた奴の名前を一言一句聞き逃すまいと、視線だけは外さなかった。

「あ……………あい……………あいぜ「アタシっスよ。」

「「!?」」

順平と呼ばれた男の十数メートル後方から静かに発された声と共に、突然現れた気配。その気配の先に目を向けた私達は、思わず言葉

を失った……

「もくっ！一体何処に行つてたの！しかも順平身代わりにしてきつ！見てよこの地獄みたいな空気っ！」

「いやいや五条さん、悠仁さんの見ました？あのまま出て来ても、結果は同じことになるの目に見えてたでしょ。」

「だから五条さんじゃなくて悟つて言つてよくっ!!」

「いやあ……流石に厳しいっスね。」

カランカランと軽い音が辺りに反響する……その音の主は悟が話し掛けているが、正直悟の声なんて耳に入つて来なかつた。

その男から発される声に音に、そしてその男の挙動に、天与呪縛により研ぎ澄まされた五感をフル稼働させる……

私があいつの声を、姿を間違える訳が無い……もし偽物なら……生きていることを後悔させながら殺してやる……そんな呪詛師じみた考えを浮かべながら。

だけど、その男の声はあいつそのもので……あの歩き方も、困った時にする癖も、その後にする柔らかな笑い方も……その姿かたち全てがあいつを本物だと証明する……

もう二度と会えないと思つていた……もう二度とその声を聞くことが出来ないと思つていた……過ぎた過去だと、何度自分に言い聞かせていたか……頭では理解していたのに、心はその事実を受け止めきれず、何度もあいつの墓に訪れて、生きていくという証拠を探して……そんな数え切れない回数を重ねて……その度にあいつは死んでいるという事実を突き付けられて……他の奴らに奇行だの言われて……

だつてさ……もう一回でも良かったからさ……聞きたかつたんだよ……あいつの声を……触れて欲しかつたんだよ……あいつの手に……

私も真依も恵も津美紀も美々子も菜々子も……皆そう思つてた……

ああ……夢ならどうか覚めないでくれ……もう居なくなられるのは嫌なんだ……

カランカランと音が鳴る……その音は段々と大きくなり、あいつが私達に近付いてくることが分かる……だけど私は此処から動かない……今度はあんたから迎えに来いよ……これまで散々探し回らせたんだ……これくらい、バチは当たらないだろう？

「五条さん達から話は聞きました……まさか十年も経ってるなんて吃驚したっス。」

ああ……本当だよ……十年も待たせやがって……

「随分と……大きくなったっスね……」

ああ……あんたの居ない間に、背も大分伸びたんだ……まだあんたに届くまでは無いけど……

「本音を言えば……アタシは皆の成長を、傍で見守りたかったですけど……」

そんなの……これから見守れば良いだろ……それに違うだろ……私達が聞きたかったのはそれじゃない……

「今更アタシに言える言葉では無いかもしれませんが……でも、これだけは言わせて下さい。」

ああ……いいよ……聞いてやるよ……

「皆さん……ただいま……」

……うん。

「二」「おかえり……兄貴／兄さん／藍染様。」「三」

ああ……やつと……やつと言えたよ……

もう絶対に……離してなんかやらねえからな……

ラスボス（父親）封印して帰ってきたらなんか10年経ってるし、知り合いと先輩方に心配されたんですが、皆さん何か変なものでも食べました？

どうもどうも、先程推し姉妹から腕を引き千切られかけた藍染喜助です。

いやあ、「もう少しだけ二人の好きにさせようかと思うっスよ。」なんて言ってみたは良いものの、まさか肩と肘が抜けるまで引っ張られるとは思っても見なかったです。はい。思いつ切りゴキンスッ！て音がしたし、何なら筋肉やら血管やらがプチプチ言い始めてました……いや本当マジ恵さん助けてくれてありがとう。

あつ、外れた肩と肘は直ぐに嵌めたし、千切れかけた筋肉やは反転術式で治しましたよ？本当に反転術式って便利だよな……まあ、その後に見た真希さんと真依さんの泣きそうな顔に罪悪感で死にそうになったけど……

……とまあ、再会早々両腕両断しかけた俺な訳だが、今何をしているのかというと。

「ひっぐ……ぐすつ……一体今まで何処に行ってたのよおお……心配したのよっ……急に貴方が死んだって……道連れになったって……うえええんっ!!」

「ええ……またっすか……?」

歌姫先輩に抱き着かれながら泣かれております……デジャブ。数日前も思ったけど、本当に貴方達……俺が死んでた十年で何があったの？

というか、全然離れてくれないな歌姫先輩……

「歌姫先輩？そろそろ離してくれませんか？」

「嫌よっ！離れたらまた何処かへ行くんでしよう!!」

「いや行かないっスよ……現に今日、ここまで逃げずに来たじゃないスか。だから安心して下さいっス。」

そう言つて歌姫先輩の背中をポンポンと叩くが、何故か逆に締める力が強まった……何で？あつ、もしかしてこれさば折りですか？もしかしてターゲツトは俺の背骨？あれ？歌姫先輩、そんなに俺のこと嫌い？おかしいな？歌姫先輩とはそんなに関わりは無かつた筈だけど……もしかしてあれか？歌姫先輩のふつくしい御尊顔に傷が入った時に言つたキザな台詞が気に入りました？いやどう考えてもそれだな。すんません顔が浦原喜助だからって調子に乗りました。本当にすんません。

まあそんなことは置いて、流石にそろそろ背骨がヤバい……さつきから骨がミシミシ鳴ってるし、内臓が圧迫されて口から色々なものがまろび出そう。

「う、歌姫さーん……そろそろ限界っス……死ぬ……このままじゃ本当に死んじゃう……」

「死ぬなんて軽々しく言うんじゃないわよこの馬鹿あああ!!」ボキッ!!

「ぎゃあああああ!!!」

「本当に死ぬかと思つたっス……」

あの後、ちやんと甚爾さんに救出されました。出来れば骨が逝く前に助けて欲しかったですチクシヨウ。

まあ何はともあれ、無事？に歌姫先輩から逃げ出せた俺は、弟子である順平さんと共に、甚爾さんに連れられ高専内の案内をされていたのだが……

「あの……甚爾さくん？」

「……………」

さつきから甚爾さんの機嫌がすこぶる悪い。今みたいに俺の言葉なんてずつと無視だし、目なんてさつき人殺した？って思うくらいには据わっている。というか殺したよね？だって身体から溢れんばかりに出て来てるもん。何がって？殺気だよ!!

甚爾さんは比較的口数が少ない方なのは知っていたが、ここまで喋らないのは見たことがない……というか、俺が死ぬまでは、結構恵さんや津美紀さん、奥さんの惚気話を聞かされたりもした。

そんな甚爾さんがここまでブチギレている理由……まさか

「まさか甚爾さん……アタシが死んだこと怒ってます？」

「……………チツ、やつと気付きやがったか。このガキ。」

…………マジか。

いや本当に吃驚したわ。だって甚爾さんよ？家族以外の生死とかあんまし興味無さそうじゃん。まさか俺が死んだことに怒ってるとは思わないじゃん。どした？俺の居ない間に変な術式にあてられたか？

「どうした？呆けた面して……まさかお前、俺がキレてた理由、今の今まで分からなかった訳じゃねえよな？」

「す、すみません……だって甚爾さん、家族以外の人間とかあんまり興味持たなそうじゃないスカ。ですから、アタシが何処で死のうが、「ああ死にやがったかあのガキ。」程度にしか思わないものかと。」

「……………お前、それ本気で言ってるのか？」

「ええ……まあ、少なくともアタシの存在は、呪術界では汚点扱いでしたからね。居なくなつて清々する方が殆どだと思つてましたし。」

「成る程な……お前には俺がそんな奴に見えていた……と。」

「いえ、そういうことでは無いんすけど、少なくとも甚爾さんにとってアタシの死はそこまで大したものじゃないと思ってましたので……」

「……………」

「……あれ?どうしたんすか甚爾さん……ていうか、何で遊雲取り出してるとんす?」

わあくすつごく速く振り回してますわく……ブルースリー顔負けのヌンチャクテクですわく……おそろしく速いヌンチャク捌き……俺でなきや見逃しちゃうね。

「安心しろクソガキ。よく言うだろ?調子の悪いもんは、叩けば直るって。」

「それで直るのは一昔前のテレビっス!アタシ人間っ!!それに甚爾さんに殴られたら脳天カチ割れ待ったなしっス!!」

駄目だこの人話通じねえ!!てか建人さん然り甚爾さん然り、何で俺の周りのゴリラはこうも会話が通じねえんだ!!さてはあれだな!?筋肉付ける過程で脳まで筋肉になったんだな!?

「流石に脳までは筋トレ出来ねえだろ。」

「普通に心を読まないで欲しいっス!!甚爾さんいつの間に術式覚えたんすか!?!」

「覚えるもクソも、俺に呪力ねえの知ってんだろ?」

「知ってますけど!!」

「それじゃ会話は終わりだ。問答無用っ!!」

「いやさつきから会話になってな……ブベラッ!!?」

「酷い目に遭ったっス……」

フィジカルギフトレッドゴリラの遊雲は、本当に脳天カチ割れます……覚えて良かった反転術式。

まあそれはさておき、俺は今何処に居るでしょくか？

正解は……此処でくつす！此処此処っ!!

正解はく……

「あらく……どうやら部屋を間違えちゃったみたいっスね……すみませんっス！」

京都校の控え室でしたく!!……て、あれ？何で皆さん固まつてらっしやるの？

「藍染喜助っ……!!」

「あつ、楽巖寺先生じゃないっスか。聞きましたよ。学長になられたんっスね。おめでどうございます。さつきは挨拶出来ず申し訳無いです。」

「あ、ああ……お主も息災で何よりじゃ……」

「ありがとうございます。まあ、蘇ったのはつい最近のことなん斯けどね。」

あれ？空気が凍ったぞ？今のは渾身のブラックジョークだったんだけどなく？ブラック過ぎて笑えない？ハッハッハ、またまたく……いやマジでごめんなさい。謝るから甚爾さんは遊雲しまつて？今度それ食らったら本当に死んじゃうから……真依さんもそんなウルウルしないで？ほら、京都の人達殺気立ってますやん。

……それにしても、さつきから京都校の皆さん、えげつないくらい警戒してらっしやる。俺なんかしたか？もしかして俺、東京校のスパイか何かだと思われてます？今ん所俺、東京校の生徒でも京都校の生徒でも無いよ？それとも俺に聞かれたら不味い話でもやってた？夏油さんも此処に居ないし……ああもしかしてあれか？いやもしかしてじゃなくて、原作通りで行ったら間違い無くあの話だろうな。



「それにしてもどうしました？皆さん畏まっちゃて。何か……アタシ達に聞かれたら不味い話でもしてました？」

「っ……」

おっ、やっぱ凶星だったか。てか、隠すならもう少し上手く隠せよ。そんなに動揺しちゃ隠せるもんも隠せんて。

「あら、どうやら凶星だったみたいっスね？」

「……そうだったとすれば、お主は儂等をどうするつもりじゃ？」

楽巖寺先生が俺を睨んだ。ウケる。敵意満々じゃん。

「心配しなくても、どうするつもりも無いっスよ。アタシにアナタ方をどうにかする程の力はもうありません。」

「特級呪術師がよく言う。」

「もう過去の話っスよ。評価も実力も、時間が経てば移り変わります。今のアタシは、特級呪術師だった男でも無く、藍染惣右介の息子であつた男でも無く、只のしがない高専生っスよ。」

「………そうであつたな。お主は、そういう男だった。」

「アタシが言いたいのはそれだけっス。それじゃあ失礼するっスよ。」  
「待て……藍染喜助。本当にお主が言いたいことはそれだけなのか？」

……は、折角見逃そうとしたのに、あんたがそれ聞いちゃう？もしかして死に急ぎ野郎です？楽巖寺先生の声優さん死に急ぎ野郎です？

そんなことする訳無いじゃん。あつ、勿論怒ってるよ？なんなら激おこだよ？だけどき、大切な妹が居る前でキレ散らかす訳無いじゃん。もう泣かせたく無いの。俺のメンタル豆腐なんだよ。今度泣かれたりしたら俺まで泣いちゃうぞ？舐めんよ？

……それに、俺は知ってるからな。虎杖悠仁<sup>主</sup>は、そんな簡単に殺られるような男じゃないって。

「勿論、アタシの言いたいことはこれだけです……ああ、でも楽巖寺先生、これだけは覚えておいて下さい。」

「あまり、彼を学生だからといって舐めない方が良い。器であろうが無かろうが、彼は強い。それはアタシが保証します。」

樂巖寺先生が顔を顰めた。そんな顔も出来るんだな爺ちゃん。さてと、言いたいことも言えだし、そろそろ戻りますか……あつ、忘れてた。

「そういえば真依さん。」

「えつ、な、何……兄さん。」

「言い忘れてましたが、その髪飾り付けててくれてたんスね……似合ってますよ。」

「っ……!!あつ、ありがとう。」

そう言つて真依さんがフワリと笑つた……やっぱり真依さんは自慢の妹だ……勿論真希さんもだけど。

言いたいことは言えた。見たいものも見れた。後は悠仁さんを信じるだけだ。大丈夫、彼は強い。

「本当に、彼をあのまま行かせても良かったのですか？」

「しようがないじやろう。奴とやり合っても、被害を受けるのは此方側。何のメリットもありはせん。」

「しかし、此方には東堂と真依がいるのですよ？此方が負けることなんて……」

「あら？私に兄さんを殺せつて言ってるのかしら？そんなこと可能であつても絶対にごめんだわ。」

「真依……お前何を言ってるのか分かってるのか。」

「貴方こそ、何を言ってるのか分かってる？私にとって、兄さんは恩人

であって恩師であって家族よ。あんまり巫山戯たこと言ってるよ……潰すわよ。」

「っ…………!!」

「そっ、そんなことよりっ！真依のお兄さんって藍染喜助だったんですね!!」

「ええ、言っただけで無かったかしら？」

「言っただけじゃないよ！教えてくれてもいいじゃないですか!!」

「教えたとして、貴方一体何するつもりだったのよ。」

「当然、サインを貰いたいです。あわよくばツーショットも。」

「…………は？」

「私、小さい頃から藍染喜助に憧れて……さつきも突然の生藍染に緊張しちゃって何も話せなかったですし……」

「……………霞。」

「へ？何ですか？」

「貴方のこと……今度からソウルメイトって呼んでも良いかしら？」

「どうしたんですか急に!？」

京都校の控え室を後にしていると、順平くんが若干キレてますと聞いた様子で、俺に質問を投げかけた。

「あの……喜助さん……」

「ん？どうしたっスか順平さん。」

「さつきの……大丈夫だったんですか？あの人達、悠仁を殺そうとしてたんですよ?」

「ええ、そうですね。」

「だったら、何故止めなかったんですか。」

…………まあ、それを聞いて来るだろうな。吉野順平にとって、虎杖悠

仁は親友であり理解者だ。そんな人間を理不尽に殺そう話し合っている場に遭遇し、それを放置したんだ。そりゃあキレるわ。

「……順平さんは、アタシに止めて欲しかったのですか？」

「……………はい。」

まあそうだろうな。俺も順平くんの立場だったらそう思うわ。

「……まあ確かに、あの時あの場で、アタシが彼等を止めることは容易でしたでしょう。」

「っ！だったら!!」

順平くんが声を荒げる。確かに俺が藍染喜助やろうと思えば、あの程度の浅知恵を止めるなんて訊ないだろう……だけどそれじゃあ

「ですが……それでは彼は成長しない。」

「なっ!？」

虎杖悠仁は主人公だ。こんな腐った世界に運悪く産まれ落ちた分不相応な主人公だ。きつと作品さえ違ければ、彼は真つ当な学生として天寿を全う出来た筈だ。

彼は産まれて来る世界を間違えた。生きるべき世を間違えた。だけど、彼はそんな残酷な世界で生きているんだ。生きなければならぬんだ。

だからこそ彼は、強くならなければならない。

「良いですか順平さん、呪術師というものは、いつも死が隣合わせに立っています。両面宿儺の器となった彼は尚更です。今日護つても明日、明日護つても明後日……アタシも五条さんも夏油さんも、何時如何なる時も側に居ることなんて出来ない。だからこそ、悠仁さんには強くなつて貰わないと困るんですよ。」

彼は言った。正しい死に方をしたいと。この世界において弱者には、そんな選択すらも許されない。

「でも……」

「分かってますよ順平さん。確かに、彼には死んで欲しく無いっすよね?」

「……………はい。悠仁は善人だから……僕に出来た初めての友達だから。」

順平くんの言葉に、俺は頬を緩ませた。友達だから救う。善人だから

ら救いたい。こんな腐った世界でも、そんな感情は眩しく暖かい。  
「なら順平さん、強くなりなさい。強くなって悠仁さんを護り護られ  
なさい。強者には、その選択が出来ます。」  
「……はい。指導の程、宜しく願います。師匠。」  
「……やっぱり順平さん、アタシのこと師匠って言うの止めませんか？」  
「嫌です。これが今の僕が師匠に出来る唯一の嫌がらせなんです。」  
「……そうっすか。」  
「やっぱりめえさごっきのこと引き摺ってんな？」

「いやあ、それにしてもやっぱり嬉しいものですね。」  
「？何がですか？」  
「ん？いや、真依さんと真希さんのことっす。」  
「だから何がです？」  
「遣した物を使ってくれたことっすよ。いやあ、これは交流戦も  
面白いことになりそうっすねえ。」

「あのく……五条さんに夏油さん？」

「ん？どうしたの喜助？」

「どうかしたのかな？」

「何でアタシが此処に座ってるんでしよう？」

どもども、さっきの一悶着が終わって交流戦を観るために戻って来たは良いんだけど最強、sの間に挟まれるように座らされた藍染喜助です。

正直な話、今すぐに此処から抜け出したい。もうね？圧が凄いのよ。圧が。お二人共、ご自分の顔面偏差値の高さ分かってる？国宝級よ？そんな二人の間に座るなんて前世インキヤの俺からすると地獄なんだわ。

「別に良いじゃくん!!僕達最強に挟まれるなんて滅多に無いことだよ？それに、特級三人が同じ画面に収まるなんて、それこそ滅多に無いことだよ。」

「悟の言う通りだよ喜助……それとも、やはり私達のことには許せないかい？」

おいこら、此処ぞとばかりにしよんぼりすんな似非僧侶。てめえさでは自分の顔面偏差値の高さ理解してやってんな？本当にやめてくれ。じゃねえと俺がお前を推しとしている奴らに八つ裂きにされんだよ!!

「いや、そういう訳じゃ無いんすけど……」

あつ、勘違いしないで欲しいけど、俺は五条達を嫌ってる訳じゃないんだよ？だってこいつらも噂に振り回された被害者な訳だし。だけれどさ、やつぱり気まずいじゃん？だって学生の時、五条達と喋ったことなんて殆ど無かったし、話し掛けても帰って来るのは舌打ちか冷たい視線だったし。だからまあ、嫌いというよりは慣れないといった感じだ。

そんなことを考えていた俺だったが、そこでふと気が付いた。

あれ？何か空気重くね……と。

「あら？皆さん一体どうしたんすか？」

「ちよつと今自分の罪の重さを悔い改めてるところ。」

そう言つて両手で顔を覆い下を向く五条に、同じく両手で顔を覆つて天を見上げる夏油。

……まさか

「もしかして……アタシ口に出してました？」

「もうバツチリと……」

……マジか……。出ちやつてたか……。最近気が付いたけど、この身体は、偶に心の声というものが漏れてしまう。これも浦原喜助のせいですか？俺への嫌がらせのつもりですか？

「えーと……一応聞いておきますが、何処から聞いてました？」

「……学生の時、五条さん達と喋ったことなんて殆ど無かったですしから……」

最強らしく無いか細い声で、五条は答えた。良かった。一応話し方は喜助さんだったのね……。いや良くねえわ。全くもって良くねえわ。どうすんだこの空気。重てえわとてつもなく重てえわ。

「ああいや……。すみません。不快な思いをさせてしまつて……」

「いや……。気にしないでくれ……。元はと言えばその原因を作つた私達が悪いんだ。」

「いやいや、本当に気にしないで下さいっス。先程も言つたと思ひますが、あの件の本当の元凶は、アタシの父親と噂を流した上層部にあゝるんスから。」

あつ、今度は楽巖寺先生が崩れ落ちた。

「あの頃の五条さん達はまだ学生っス。社会も汚い腹積りも知らない子供だったんっスよ？」

何時の世も、社会というものは噂によつて回つてゐる。俺の前世だつてそうだ。信憑性の無い噂を信じ、噂によつて振り回され、そうやつて社会や世論は成り立つていた。どれだけ捻くれた子供だつて、大人がそうだとさえば少なからずとも信じてしまふ。

噂とはそういうものだ。そして何時だつて、そういう噂に惑わされる子供はいるものだ。

「それに、昔は陰悪だったかもしれませんが、今はこうやつて皆さんとお話しが出来てるんですから。アタシにはそれで充分っスよ。」

「喜助……」

我ながら小っ恥ずかしいこと言ったな……あれ？

「どうして五条さん達、蹲ってるんスか？」

「いや……僕達ってこんな良い子を蔑ろにしてたんだと……」

「喜助って……こんなにも良い子だったのか……」

「ええ……本当どうしたんスか……」

「ほっとけそんな馬鹿共。」

「そうよ。そんなクズ二人、気にするだけ時間の無駄よ……そんなことより喜助、貴方京都校に来ない？」

項垂れる最強二人に、それを貶す甚爾さん。同じく二人を貶しながら俺を京都校に勧誘する歌姫さん。これをカオスと言わず何と言う。

「フフフ……全く、君は相変わらず面白い男だね。」

「冥さん、笑ってないで助けて欲しいっス……」

俺は愉快そうに笑っている冥冥さんに助けを求めたが、どうやらそれも叶いそうも無い。ついでに言う俺と冥冥さんの仲は十年前から比較的良好だったりする。言ってしまったえば商売関係ではあるものの、金銭至上主義な彼女の存在は俺からすると凄くありがたいものだった。

「いやすまない。こんな光景、前の君からは想像出来なかったのね。遅れてしまったが、戻って来てくれて私も嬉しいよ。」

「ありがとうございます冥さん。アタシも、これから頼りにさせて貰うっスよ。」

「それは嬉しいね。折角誤解が解けて皆からの信頼を得たのに、まだ私を頼ってくれるのかい？」

「いえいえ、確かに皆さんへの誤解が解けたことは嬉しいっスけど……アタシとしてはやっぱり、冥さんに依頼するのが一番落ち着くので。」

「おや、もしかして口説いているのかい？」

「まさか、アタシにそんな度胸は無いっスよ。ただ事実を述べただけっス。」

「フフ、まあそういうことにおこう。」



ん？何か揶揄われた気がするぞ？……てか、何で皆さんこっち見てんの？

「ねえ傑……喜助つてもしかしてたらしだったりすんの？」

「さあ……何せ私達は碌に喜助と会話していなかったからね……意外な発見だよ。」

「いや、あいつは昔からこうだったわよ？私の時だって……」

「皆さくん、聞こえてるっスよ。」

皆して俺を女たらしみたいに言うんじゃない。こんな美人にナンパ出来るんだったら、前世の俺にだって彼女がいたかもだろうが。インキヤ舐めんじやねえぞ？

「あははくメンゴメンゴ。まあ、喜助がたらしなのは置いといて、そろそろ交流会始まるから皆席に着こうよ。」

「いやですから」

「それもそうだね。喜助がたらしなのは意外だったけど、今は教え子達の成長を見守るとしようか。」

「あの話……」

「悔しいけど、クズ共の言う通りね。ほら喜助も早く席に着きなさい。」

「歌姫先輩もアタシの名前にルビでたらしを入れなくて欲しいっス……」

「こればかりは君が悪いよ。ほら可愛い弟子と試合を観戦するとい……金蔓。」

「冥さんは少しオブラートに包んで欲しいっス!!」

本当に呪術師って奴は碌な奴がいねえ!!

……とまあ、なんやかんやで時間は進み、気が付けば試合開始一分

前、俺は先程と同じポジションに座らされ、隣で生徒達にアナウンスする五条の言葉を聞きつつ、これから起こるであろうことに備えていた。

『それじゃあ開始二分前でーす。ではここで喜助と歌姫先生からありがたーい激励のお言葉を頂きます。』

「はあ!？」

「はあ……やっぱりこうなったっすか……」

分かってたよ、こうなるってことは。此処に戻って来てから何かとイジられキャラ的なポジションに収まりつつあったからな。

「あれ?もしかして喜助、予想してたの?」

「まあ、此処に戻って来てからの五条さんを見てたら、こうなるってことは予想は出来てましたので。」

「さっすが喜助、じゃあそんな喜助から、皆に気合いの入る一言を!!」  
「そんなにハードル上げないで欲しいっす……まあ、真剣勝負と言っても、これは学園行事……皆さん大怪我だけは気を付けて下さい。何事も身体が資本っす……それに、皆さんが怪我するとアタシも悲しいので。」

我ながら捻りの無い台詞だな……あれ?何で皆さんそんなにボルテージ上がってるの?

「……本当に、そういうところがたらしなんだよ喜助。」

「えっ!?!何のことっすか!?!」

「無自覚なのが余計タチが悪いよ。」

「えっ!?!」

「さてっ!!たらしの喜助は置いといて、次は歌姫先生からのお言葉でっすっ!!」

「はっ!?!私この後に言うの!?!え……えーつと……あー……ある程度の怪我は仕方が無いですが……そのお……時々は助け合い的なアレが……」

「時間でーす。」

「ちよっ五条っ!!アンタねえ!!」

「それでは姉妹校交流会スタアートオ!!」

「先輩を敬えっ!!」

「五条さん……アナタ少しは歌姫先輩に優しくしましょうよ……」

「喜助え……っ!! 貴方はこんな人間になつたらだめだからね!!」

「あー……頑張つてはみるっス……」

そう言つて、俺は抱きついて来る歌姫先輩を撫でる。正直役得だと思つてますよ……はい。

「あつ、言い忘れてたけど、優勝チームのMVPには三日間喜助を好きに出来る権利をあげるから頑張つてね。」

「ちよつと待つて下さい?」

チヨットナニツテルカワカンナイ。

〜一方その頃各チームのスタート地点〜

『あつ、言い忘れてたけど、優勝チームのMVPには三日間喜助を好きに出来る権利をあげるから頑張つてね。』

「よしお前ら事情が変わつた。死ぬ気でやれ。特に悠仁、お前は絶対に東堂を潰せ。生死は問わねえ。負けたら殺す。いいな?」

「えっ!?! 真希先輩さつきと言つてること違うんですけど!?!」

「ああ……やっぱりこうなつたか……」

「しゃけ……」

「うるせえよ。おい恵、お前もだ。」

「分かっていますよ……てか真希さん、相手譲って下さい。真依さん倒せば真希さんがMVP取るの確実じゃないですか。」

「はっ！嫌だね。言ったじゃねえか。真依を倒せるのは私だけだし、私を倒せるのも真依だけだったな。」

「まあ……それもそうですけど……」

「女々しいわよ伏黒。真希さんがこう言ってるんだから死ぬ気で殺るわよ。あーあ、真希さんと真依さんが戦つてるところ見たかったな。」

「あのか釘崎？」

「あ？何よ虎杖。」

「その真依さんって、真希先輩の姉妹か何か？」

「何当たり前なこと聞いてんのよ。当然じゃない。」

「へく、強いのか？」

「当然。それに良い人よ？前にこつち来た時だって、どつかの馬鹿が死んで落ち込んでる私達を励ましてくれたし。」

「それは本当にごめんなさい……」

「うっせえぞ野薔薇に悠仁。」

「うつつす!!すみません!!」

「良い機会だ悠仁。お前にも教えといてやるよ。真依はな……」

「今の放送聞いたわね？死ぬ気で働きなさい貴方達。」

「えっ!?!急にどうしたの真依!?!さっきまで乗り気じゃ無かったのに!?!」

「はあ……流石真依ちゃん。ブラコンここに極まれりって感じ……」

「だからそんなんじや無いっての。ただこの勝負、確実に真希が本気を出すわ。」

「真希って、真依のお姉さん？」

「ええ。」

「別に問題は無いだろう？彼女は四級、この中でも一番格下だ。」

「はあ……だから貴方は駄目なのよ加茂。」

「……何だと？」

「いい？よく聞きなさい貴方達。真希はね……」

「今この場に居る誰よりも、特級に近い実力を持つてる奴だ。」

「<sup>最強</sup>五条悟を一回殺した人間と同じ力を持った、間違い無く最強に最も近い奴よ。」

「だからこそ、あいつを倒せるのは私しか居ねえんだよ。／居ないのよ。」

さてさて始まりましたよ交流会。やっぱり学園行事は心が踊るよね。特に娘みたいに可愛がってた妹達が活躍してると余計に。

ところで話が変わるが、皆さんは怪獣映画なるものを観たことはあ

るだろうか？怪獣vs怪獣然り、人間vs怪獣然り、あの派手な演出に胸を躍らせた人達も多いだろう。そして大人になるにつれ、派手な演出に派手な演出に胸を躍らせながらも、怪獣に壊された街やインフラの修繕費っていくら掛かるんだらうと疑問をまた始めた人達もまた少なく無い筈だ。

……ん？この話関係なくないってか？いや、関係あるんだなこれが。

「いや、真希さんも真依さんも張り切ってますねえ……ところで、これって修繕費いくら掛かるんでしょう？」

「やめろ喜助……考えるだけでも胃が痛くなる……」

「本当に……今回京都校が会場にならずに済んで良かったわい……」

「あー……ご愁傷様つス夜蛾先生……後で胃薬作りますね……」

「そうしてもらえると助かる……」

そう言ってお腹を摩る夜蛾先生に同情しながら画面に目を向ける。そこに映るのは、すっごく張り切っているのだろう真希さんと真依さんが辺りの木々を薙ぎ倒し焼き払う姿……これは酷い。

ついでに言うと、去年は乙骨さん家の里香さんが京都校の敷地の半分以上を焼き払い、それを見ていた楽巖寺先生は失神し、五条と夏油は腹を抱えて爆笑していたそうだ……だからアンタ等はもう少し年上に気を使いなさいよ……

……だけどもあ、

「やっぱり、身内の成長は嬉しいものつスねえ……」

「いや、成長するにも限度があるだろうこれ。喜助、一体彼女達に何をしたんだい？」

おいおい、何をしたとは失礼な。まるで人をマッドサイエンティストみたいに言うじゃあないか。

「別に、アタシは何もして無いですよ。」

「嘘だね。だって真希のあれは完全な天与呪縛だ。高専に入学してきた時は中途半端だったのにも関わらずに……だ。それに真依の呪力量にも疑問が残る。この呪力量、間違い無く一級……いや下手すれば特級レベルだよ。こんなこと出来るの、喜助しか居ないだろ。」

うわ、二人共めっちゃ睨んでくるじゃん。

「だから、アタシは何もしてませんよ。ただ遺しただけっス。」

そう、俺は何もしていない。俺はただ造り、遺しただけ……過程がどうであれ、それを実行したのは真希さんと真依さんだ。

「当時の真希さんと真依さんは、呪術師として生きて行くには実力不足でした。生まれながらにして厄介な縛りを付けられたせいで。」

同じ日に少し違う時間に産まれただけ……ただそれだけ。なのに彼女達は呪われた。強さを奪われ、家族を奪われ、生き場所を奪われた。

だけど彼女達は強かった。矛盾なのは分かっている。喜助らしく無いことを言っていることも分かっている。それでも、姉妹の為に強くあろうとするあの姉妹は、確かに強く尊い存在だった。

だから考えた。だからこそ造った。

遺伝子レベルが高い者限定で、呪力を譲渡することの出来る機械。

二人を護りたい一心で造り、遺した……二人の為だけの研究。

それが例え規定を犯す物であっても、それが原因で俺が命を落としたとしても……俺は、彼女達の呪いを少しでも和らげてあげたかった。

「双子だから忌み子だとか、双子だから弱者だとか、そんな理屈なんてクソ喰らえっス……まあ、あの時はまだ完成して無かったので、二人には場所も使い方も教えて無かったんすけど……どうやら成功したみたいっスね。良かったっス。まだ力の使い方は雑ですけど。」

「いや雑なんてもんじゃ無いでしょ。ちゃんと見えてる？ 焼け野原だよ東京校。」

「……まあ、それは申し訳なく思っています。」

いやほんとスマンで。だから夜蛾先生も楽巖寺先生も、そんな顔すんのやめてくんない？ 書いてんのよ。「そういやこいつも特級だった……」……って。

「だってしょうがないじゃないっスか。こんな世界に身を置いてるんです。アタシの身に何かあった時に、最低限の自衛手段を遺しておきたいじゃないっスか。」

「これのどこが最低限なんだ……せめてもう少し控えめにも出来ただろう……」

「そういうものですかねえ……?」

「そういうものだ……」

「そうっすか……次からは気を付けるっす。」

まあ、あれは二人の為に造った物であって、これから先同じ物を造るつもりは無いけど。

「それにしても喜助って、本当に真希達のこと大好きだね。」

「そりゃあ勿論。大切な妹達ですから。」

「ふーん……大切な妹ねえ……真希達かわいそ。」

「ん?五条さん何か言いました?」

俺がそう言うのと、五条はふいと顔を背けた。

「いや何でも。というか喜助、観なくていいの?真希達の活躍。」

「ああ、すみません。ちゃんと観なきゃっすね。」

なんか話を逸らされた気もするが、今聞くのはよそう。俺は見なければいけない。俺が居なくなつた十年で、あの子達がどれだけ強くなつたのかを……それがあの子達の兄であり、師匠でもある俺の役目なんだから。

「悟、本当に喜助に気付かさなくても良いのかい?あの子達の気持ち  
を。」

「しようがないじゃん。喜助の自己評価の低さは、間違いなく俺達も  
影響してるんだ。こればっかしは俺達が何か言う資格はないよ。」

「しかし……」



「それに面白そうじゃん？これまで初恋拗らせてきた二人が、喜助にどうやってアプローチするのか見るのも。」

「悟……君って奴は……」

「何だよ？傑だって同じだろ？」

「……まあ、それもそうだけど。」

「何かあったらすぐにアドバイスするさ。同級生だつとは言え、喜助はまだ学生で、俺達は教師だからね。」

「はあ……分かったよ。私も出来るだけサポートしよう。それにしても、ライバルは多そうだけど。」

「それも面白いじゃん。いや〜青春だねえ。」

「悟、君本当にそういうところが人でなしって言われるんだよ？」

「傑も似たようなもんだろ。」

（場面は変わり競技会場）

「なあ伏黒……俺、今初めて怪獣同士の戦いで逃げ惑う人間の気持ちに分かった気がする。」

「お前それ真希さんの前で絶対言うなよ？」

まあ目の前で現在進行形で起こってる惨劇を見れば、そう思うのも無理無い……というか、口に出さないだけで俺も思ってるし……あ、また木が薙ぎ倒された。

こうなったのも全部五条先生のせいだ……サプライズで兄さんに激励の言葉を話させた所までは良かった。凄い良かった。そして五条先生からの無茶振りにも完璧に応える辺り流石は兄さんと思っただしやる気も出た。

……だけど問題はその後だ。

『あつ、言い忘れてたけど、優勝チームのMVPには三日間喜助を好きに出来る権利をあげるから頑張つてね〜。』

その放送を聞いた瞬間、真希さんの目の色が変わった。あれは捕食

者の眼だった……肉食獣の眼だった……呪術師……いや人間がしていい顔じゃ無かった……多分、というか確実に真依さんも同じ顔をしてるだろう。兄さん、これ終わったら喰われるんじゃないか……何がとは言わないが。

まあ何にせよ、あんなった双子を止められる奴は今この場に存在しない。つうか出来てもしない。学校の催し物で死んでたまるか。

俺は開始の合図が送られた瞬間、目の前の木々を木っ端微塵にしなから駆け出した真希さんを見て、改めて決心した。

藍染喜助 18歳

今回特に見せ場を作らなかつた人であり、さらつととんでもないもん開発してくれやがった問題児。

元呪術高専東京校 三年生

階級 特級

術式

鬼道呪法：破道・縛道を扱うことが出来る。詠唱を唱えることで威力や拘束力が上がる。

刀剣呪法：藍染家でのみ受け継がれている呪具「浅打」の能力。普段は只の日本刀の姿をしているが、解号を唱えることにより能力を発揮する。能力については持ち主の才能による。主人公の場合、これをバラして仕込み刀にした。

浅打：藍染家で代々受け継がれている呪具。刀は親と子に一振り

ずつ与えられる。何故親と子にのみ与えられるのか……それはこの家の風習によるもの。

さしす組の同期だったが、当時呪術師界隈で有名な、最悪の呪詛師の息子と言うことで嫌われていた。しかし、灰原の救済で後輩達からの好感度が爆アガリ。そんな矢先、最悪の呪詛師である父親が、ミミナナの件直後に襲撃、相討ち覚悟で自分諸共父親を封印した。

伏黒家とは、母親を呪霊から救ったことをきっかけに交流を深めた。そこから伏黒甚爾とは良く飲みに行く仲（この頃主人公中学生）。星漿体任務の際には、甚爾に協力してもらい天内理子の死を偽装した。よく伏黒家にお邪魔しているので、伏黒恵や津美紀、ママ黒のことは親戚の様に思っている。（あながち間違つてない。）

視聴覚室で歌姫に泣かれた時には、あれ？もしかして心配してくれてる？と思つたが、その後勢い余つて鯖折極められ、やっぱり嫌われているのかと見事に勘違い。この度、冥冥との会話から人誑しの称号を得た。尚、本人は解せないといった模様。

父親を倒す前に、これから遺してしまうだろう姉妹の為に研究し造り出した機械を置いて逝つた。本人としては精一杯の善意だし、姉妹もそれに感謝しているが、周りとしてはたまつたもんじやない。今回見事に怪獣対戦が実現してしまった。本人は姉妹の成長にほっこり。周りはこれから行うであろう修理やら何やらを想像してげんなり。そういやこいつも五条<sup>特</sup>と夏油<sup>級</sup>と一緒にだつた。

### 禪院姉妹

今回校内を焼け野原にしたモンスターガールズ。

クソみたいな実家から連れ出してくれた主人公を救世主のように思っているし、主人公の実家は自分達の実家だと思っている。主人公のこと大好き。家族（意味深）として。

兄が見てくれているのでと気合いを入れていた所で、五条の優勝商品は兄さんだよ発言を受け、アクセル全開どころかニトロエンジン着火。この度姉妹共々仲良く肉食獣となる。

伏黒甚爾

妻の命を救ってくれた喜助のことは、家族の様に思っている。何なら津美紀の旦那になって欲しい。それぐらいには喜助のことを認めている。喜助が死んだことを夜蛾達に聞いた時、色んな感情がごちゃ混ぜになった。喜助が嫌われているのは知っていたが、本人からの強い希望で口は出さなかった。今となっては後悔している。喜助を嫌っていた五条達も悪いが、喜助に何もしてやれなかった自分も悪いと思っている。しかし、一番悪いのはあらぬ噂を流した上層部。理解はしているが、報告された時には殴りかかりそうになった。

交流会当日に、死んだと思ってた喜助がヘラヘラと何事も無かったように出てきたので切れた。

は？ああ死にやがったかあのガキ。程度にしか思わない？は？何言っただこのガキ？自分は呪術界の汚点？

ほー……そうかそうか。よし、取り敢えず面貸せクソガキ。

さしす組

うわあああああん!!喜助ごめんよおおお!!!!!!